

<談話記録>

戦争期の回想

——『私の履歴書』補遺——

とう	ばた	せい	いち
東	畑	精	一
聞き手:	なか	むら	ひさ
	中	村	尚
	すえ	ひろ	し
	末	廣	昭

1978年6月19日

学者廃業

——今日は日本経済新聞の『私の履歴書』について、いくつかおたずねします。それから、前に朝鮮旅行、台湾旅行をされたところまで伺いましたので、そのあと、戦時中の東大経済学部での講義とか、フィリピンの話とか、そんなことを伺えればと思っています。

東畑 台湾、朝鮮のことは書かなかったね。

——はい、『私の履歴書』には入っていません。いろいろ伺ったなかで入ってないお話は、沢山ございます。たとえば、柳田国男氏のことなども入っていません。シュムペーターの翻訳のエピソードも全然出てきません。全体としての印象を申し上げますと、『私の履歴書』に書かれた)前半の箇所は、私たちいろいろ伺ってきたわけですが、耳で聴いていたのと、こうして初めて文章での表現を読ませていただくのとでは非常に違います。文章に張りがあって簡潔になり、名文家だらっしゃるという印象を持ちました。

ところが、プログラム1, 2, というふうにして、研究計画を少し紹介されたあたりか

らあとが、やや、精彩を欠いて、少し気楽に書き流されたような気がしました。

東畑 関係ある人がね、皆生きているんだ。たとえば最近、あんまりアジ研の悪口を言うと不機嫌になるじゃないか。

——ただ、最後の1, 2回の箇所は、またぐっと引き締まって、初めの名調子に戻っておられるというふうに読みました。

東畑 もうちょっと回数でも多いとね、のんびり書けたんだけどさ。書いとるうちに、やめるわけいかんだろう。だんだん増えてきたんでねえ。びびっちゃってね。終わらないんだよ、戦前だけでも。こりゃいかんってんで……。

僕はね。君らにいろいろきかれたもんだから、これがかえってよくってね。初めの方書くときにさ、ああ中村にきかれたから書いとうってね。そういうことあるんだよ。そういう点では、非常に役に立ってね。これをやっていたことが。

——それから、これは少し大きな問題なんですけれども、24回目にお書きになっているところで、「戦後になって、もともとはあくまで大学教授として勉強したいと思っていたが、やがて、自分の脳の働き、気概、等が学

究を続けるのに向かないという意識が日増に強くなった」とあるわけですが。

東畑 学者廃業だろう。それは総研(農業総合研究所)のところで書いたけれど、大学を辞める頃とおなじ頃なんだ。ああ、これは、俺は学者には向かってことになってね。

——学者に向かないというふうに判断されたのは、研究プログラムのところですね。農業を国民経済のなかにちゃんと位置づけて、価格理論のなかで説明できるようにしたいというふうにお考えになったところにそもそ少し無理があったのではないのでしょうか。

東畑 いや、それは、ひとつも矛盾してはいないよ、研究としては。

そこでね、なぜ向かんようになったかと言うとね、つまりなんていうかね、粘着力がなくなったんだ。ひとつのことでギューギュー、ギューギューやっていくっていうそういうあれがなくなったんだ。うん、学者としては続かないんだよ。

——そうですか。研究のプログラムに無理をお感じになったとか、そういうことは……。

東畑 いやいや、そんなことはない。そんなのは直しゃいいんだから。

——たとえば自作農の経営を価格理論で分析しようというのは非常に難しいので……。

東畑 そうじゃない。難しくないよ。はっきりしてるんだ、俺の問題は。これはね、問題が難しくて辞めたんじゃないんだよ。

——そうですか。

東畑 だから、アジ研にきたのも、ひとつには

それがある。ここで学者として俺はやったことない、一度も。諸君に学者としてつきあったことは一度もない。その証拠も書こうと思ったけど、あんまりいたずらになると思ってね。

書斎がなくなっちゃったんだ、俺。

——自宅にですか。

東畑 俺のうちに書斎がないんだ。学士院会員、いま150人くらいおるが、書斎がないのは俺ぐらいのもんだもんねえ。それでその、物がだらしなくなっちゃったんだよ。書斎があるとちゃんとしてるわ。書斎がないだろう。だからどこに何が入っているのか、全部わけがわからんのだよ。

——ご自分で決心されたんですか。

東畑 そうそう。気持ちよく。かかったぞ、2、3年はそれでも。そういう気持ちで平気になれるってことは、悲痛なことだからな。(笑)

——そうですね。

東畑 それで翻訳なんかも一緒にやったんだ。ああいうものは、粘着力がなくなったってできる。1週間休んでたって、いくらでも進むんだ。翻訳なんか、ここまでやっとして1週間遊んでたって、ちょっと帰ってさ前後読めば、ああわかったって、それでやればいいんだ。

——しかしよくご決断をされましたね。

東畑 東大をよすころだ。総研よしたのはその頃だから。だいたい60頃だ^(注1)。だって学者を廃業しないで廃業してるのと同じようなやつが沢山おるんだ。余計なことを宣言したことは一遍もないよ、今まで俺は。学者廃業した、なんて言う必要のないことだからね。それは弁解でもなんでもないんだからね。正直な話よ。書斎なくしちゃっ

たんだ。その頃だよ、どっかの新聞社が学者の書斎を撮りにきたんだ。「ここだよ」って言ったら「どこですか」ってきいてね。(笑)「茶卓台だよ。原稿も茶卓台で書いたんだ」って。

もっともその学者だってね、学者だなんて言わなくたっていいと思うことが多いしね。勉強していればいいんでねえ。だけどさ、世間が「学者グループ」だとかくだらないことを言うからさあ……。学者なんてものは、グループなんか作れっこないんだよ。教授は作れるからいいけど。勉強しない教授がグループ作って、「教授グループ」なんてよく言うけどさ、学者はグループ作れんぞっていつて……。 (学者を辞めたのは) 別に問題が難しかったから逃げたんじゃなくって、ひとえにね、連続して同じことをずうっとやってるといふそういうことがすっかり嫌になっちゃった。それが一番、根本です……。続かないんだねえ。

(注1) 東京大学の停年退職は昭和34年3月。

大学の教え子たち

——2日前に経済学部の大内力さんの還暦記念のお祝いの会で、大内先生が配られた本に、自分が師事した学者というのは3人いて大塚久雄先生と、東畑精一先生と、宇野弘蔵先生だと、そういうふうを書いてあるんです。で、それぞれ3人の方が、自分の体系を持った学者でいらっしゃったと書かれてありますが。

東畑 大内君にはえらい影響を与えたわけではないがね。(笑) 文句ばかり言ってたよ。でも非常に愛情を持った、大内君に対してはね。愛情つ

たら言葉が悪いけど、いい男だったね。それはいまだに変わらないがね。この前会ったけどさ、あいつは俺の言うことなんか聴きやあしない。

——学問的には、やはり宇野先生が一番大きな影響を与えた人だと思うんですけども、その本には、ゼミは大塚先生のゼミで、それからその農業の問題を考えるにあたっては東畑先生に、というふうなことが、書いてありました。

東畑 俺を相手にしたことは役に立ったかもしれん。僕を敲き台にしやがってねえ。僕に反対していたらきっとようやれるってことだね。

——反面教師ということで。

東畑 そういうことはあったかもしれんな。強いて解釈すればね。で、僕もね、大内君の言うことはなかなかよくきいてた。こういうバカな見方と思いながら、大内君には、いろいろなこと教わってるわけ。いずれにしろ、あの人は僕が非常に可愛がっていた学生なんだけどねえ。あのクラスには2人おったんだよ。古谷弘、これは大秀才。これも非常に可愛がったんだ。古谷と大内さ。で経済学部についてね、俺は何もしなかったけれど、マルキシズムの大將と近代経済学の大將は残してやったんだぞと僕はよく言ってね。(笑)

——そうすると、植民政策の講義を、お二人とも聴いておられたわけですか(注1)。

東畑 もちろんそうです。点も付けた。あんまりできなかったがね。(笑) 講義はしたし。古谷はことに、助手になってからも僕の助手をした。植民政策みたいなあんなアホなことはやるなって僕は言ってね。そりゃ理論経済の方がいい。

大内君はね、学校の関係は少ないですよ。けど卒業してから世話したりなんかして、非常に親しくなってね。日本銀行に入った、いや、入ったことになったんだ、通ったんだ。そしたらね、その当時の総裁がね、「親父の子どもだってね」^(注2)ということらしいんだよ。それで採用を取り消した。何を言うんだって俺は言ったよ、「親父が悪けりゃ子どもも悪いっていいのか。総裁が偉いと子どももいいんだね」。それはどうも痛いところを話したらしいんだね。俺が恨まれたよ、そんなことを言うって。

——結局駄目ですか。

東畑 そいでね、東亜農業研究所に入った。石黒忠篤（昭和15～16年、農林大臣）の。その第1号だよ。そんなことから農業をやることになってね。大内君は堅い人だから、東大へ戻っていいかって、われわれと相談してね。「そろそろ戻れるなら結構だ、戻んなさいよ」と言ってね。だから関係は、むしろ学校を卒業してから親しくなった。結婚の媒酌もしたんだ、俺が。大内（兵衛）さんの友達も沢山おってね。それで「あんたは友達、沢山おるじゃないか。僕がでるまでもない、偉そうな顔をして」と俺はいったんだ。「まあそう君、言うな」ってね。だんだん気の毒になってきた、親父が。あの例の問題で（人民戦線事件）、大内家としては一番惨憺たるときだからな。息子は日銀入ったけど駄目になっちゃった。秀才なんだ、息子は。「まあそんなこと言わないで、媒酌してくれ」って、こう言ってきて。「そんならやります」って言ってね。結婚式で俺、大気焰あげてやったんだよ。向こうの奴らだってきてるんだ

よ。

高野岩三郎先生もきてたんだよ。それで、保守反動はね、石黒忠篤と俺だけなんだ。（笑）高野岩三郎さんはね、主賓だ。挨拶してね。みんないい地主だ、なんて言いやがって……。 （笑）保守反動だったのは僕と石黒だけだろう、あとは彼らの一派だけだ。

——戦時中に保守反動というような感じでみられたのですか。

東畑 あの連中から言えばもちろんそうなるんだよ。戦時中だろうと何と言わず……。

あれはね、俺は、非常によく覚えているんだ。贅沢禁止令が出るねえ、昭和19年だよ。結婚式はね、贅沢禁止令になるっていう。もう物資がない頃で、大内さん努力してね。オヤジさんが酒を持ってきたんだよ、灘から。あの人淡路島の出でね。それから北海道のね、町村農場をよく知ってたんだよ。そこから玉子や、肉を持ってきたんだな。ところが当時酒ってのは水増し酒ばかりだったからね。帝国ホテルでやったんだよ。それで酒は持ってきたっていう話だからね、おかしいじゃないかこの酒って、その際に言ったら、「いや、それはホテルの酒なんだ。あとから持ってきてまいりますから……」って。（爆笑）で、本当の酒なもんだから濃いんだねえ。それで酔っちゃったんだ俺は。

——スピーチのときでもう気焰を上げられたんですか。

東畑 そらもう。挨拶のときに気焰を上げた。そうか、大内さん、そんなもの配ってた？

——ええ。『旅人』という題で、思い出話

のようなものがいくつか書いてあります。

東畑 大きな本？

——それほどではありません。東畑先生の『一卷の人』と同じような本です。

東畑 それは楽しみだ。

(注1) 昭和14年から東京大学経済学部で「殖民政策」講座を担当。

(注2) 大内力氏の父は東京帝国大学経済学部教授の大内兵衛氏。昭和12年12月のいわゆる「人民戦線事件」によって検挙され、翌昭和13年有澤寅己助教授(10月)、脇村義太郎助教授(12月)とともに12月に休職となる。

祖母と大叔父

——『私の履歴書』の最初のほうで、おばあさんが稀代の読書家だったというふうに書いてありますが。

東畑 そんなこと、たいしたことないんだよ。やることなかったんだよ、ばあさんは、もう。「かなつんぼ」で。誰も相手にしなかったんだ。昔から本は読むこと好きだったんだ。新聞なんか三つ四つきてると全部持って行ってねえ、自分の所に。小説もねえ、みな持って行って。「わしゃ、もう、こんなにあって、しゃあないんだ」という。

そのばあさんの弟は偉い奴だったんだよ。そのことは書かなかったけど、今度書こうと思って、これは詩人でね。詩人で酒呑みでさ、代議士にいったんあったことがあるんだ。伊藤博文のあれ、志士と酒——志士の友って奴だ、おばあさんの弟は。そう矢土勝之。号を錦山といったんだよね。もうひとり当時ね、詩人がおってね、森槐南。森槐南と矢土錦山って者は、伊藤博文の呑み友達な

んだよ。

——明治維新のあとの頃の伊藤博文？

東畑 そうそう。政治家になってからでしょうがね。それで吞んでばかりおったんだ。その詩人なんだよ。森槐南もそうなんだけどね。それで、改造社がね、円本全集って最初にやったやつに、『明治文学全集』ってあってね、それに矢土錦山、出てるそうだがね(注1)。俺、見てないんだけどね。僕が大学いってる最中に出たんだ。『錦山遺稿集』ってのがあってね。上海で出てるんだ、錦山遺稿が。それは持ってたんだ。親父に言ったら、「お前知らないのか」って言ってね、家中探したらあってね。持ってるんだけど、ろくな詩じゃないもんね。

(注1) 『現代日本詩集 現代日本漢詩集(改造社版)』(『現代日本文学全集』第37篇)改造社 昭和4年の488~489ページに矢土錦山の漢詩が掲載されている。

文章作法

——あの、東畑先生の文章を読ませていただいて、非常にその……。

東畑 そりゃ影響って言うんだろ。(笑)

——いえ、影響ではなくて、文章家でいらつしゃると申し上げているんですけど、文章は非常によく推敲されておられるのでしょうか。

東畑 いやあ、それは君、俺はもう、その本当に下手でねえ、作文が下手でねえ。表現力がないんだよ。だから、文章がうまいなんて言われるとおかしいんだよ。

——そうですか。でもお話のメモを取らせ

ていただいたのをこうやって読み返していて、それから『私の履歴書』を見ると、どうもこちらの方が非常に引き締まっています。学者を廃業されたあと、いろいろ序文やなんかを農総研なんかからお書きになっていますが。

東畑 それは昔から書いているよ。

——そういう短い文章はすぐにお書きになったんですか。

東畑 いやいや、充分かかるよ。本1冊読んで書くんだから、遅れてね。いい加減な序文はひとつもないんだから。

——ええ、序文書きの名手でいらっしゃる。

東畑 そうそう、それだけ序文を書いたんだから。恐らく100くらいあるんだ。

——アジ研の初期の頃も書いていらっしゃった。

東畑 ちよいちよいね。農総研では勉強しないもんだから。すべて(序文を書こうとする)本を勉強して書くんだから、割合にこうちょっと論文だらう。

——できの悪い本についても、これは駄目だとは書けないですから、よいところを読み込むという具合だったのでしょうか。

東畑 そうそう。あるいはこういうふうにやったらもっとよいだろうと。

学問と「政策」

——次に一日会、大正11年11月にできた農業研究会についてお伺いしたいと思います。

東畑 ああ、一日会ね。まあ月に一遍くらい寄って。

——当時の農業の時事的問題を議論されたんですか。

東畑 ほとんど役人だったからね。だって民間で農業やっている人はほとんどいなかったんだからね。

——どのくらいの人たちが集まっていたんですか。

東畑 10人くらい。

——メンバーのステータスのほうは？ やりかなり若手の方ですか。

東畑 いやいや俺より上の人ばかりだよ。農林省の人とか。山田勝次郎が一番若いんだよ。勝次郎と僕が。でもみんな死んだね。

——こういうものが農林中金の構想を作る場になっていくということはあったのでしょうか。

東畑 いやそんなことはない。

——農林中金の設立の初期に、東畑先生は関係されておられますよね。

東畑 いや俺は何も知らなかった。翻訳しただけだった。翻訳したら、それが農林中金だったんだから。

——そうしますと、この一日会というのはとくに具体的な政策の立案の場になるようなことはなかったのですか。

東畑 そんなことは全然なかった。それに僕は今でもそうだ。政策を言う奴にロクな奴はいないとコバカにしているのだから。それに小さい頭で政策を言う奴があるかと。いっぺんとしていいことないんだから。よしてくれよ、アジア政策なんてつまらんことをねって。死ぬとき言えって。頭

が大きくなってから。だいたい僕は政策は分らんよ。今でもそうですよ。政策を立てたいという奴を、俺は相手にしていないんだ。政策というものはもっと総合的なもんでね。学問というのは、こう一方的なもんなんだよ。非常に大きなことやるのは、偉くなって頭がこうなってるものがやるんだ。それでまた立派な政策ができるんだ。小さな頭でもの言うなと言うんだよ。

——そういうことと、たとえば農政審議会だとか基本問題調査会など、政策のための審議会の仕事をずっとしてこられたこととの関係はどういうものになるのでしょうか。

東畑 年とってからやればいいんだよ。

——学者を廃業してから。

東畑 そう。(笑) たいしたことないよ。政策やって一番役に立ったのは物価審議会、物価委員会だったかなあ。

——いつ頃ですか。

東畑 昭和13~14年頃。池田成彬さんがおって、これはよう勉強になった。これは今度書いて本にするよ。

——先生の略歴のなかでは中央物価委員会となっています。

東畑 昔の商工省だ。あとで価格形成委員会になった。確か、戦争準備委員会の一種だな。

「殖民政策」講座をめぐって

——それでは、朝鮮、台湾からお帰りになって、それで経済学部の「殖民政策」講座を担当される頃のお話をお伺いしたいのですが。先生の朝鮮、台湾旅行は昭和9年になっ

ております。

東畑 そうそう。経済学部に入ったのは昭和14年だから(兼任教授)、それは5年も前の話であって。

——そのときは、とくに植民地問題をやるという気はまったくお持ちではなかった。

東畑 そういう限定は何もしないんだ、俺は。何問題をやるっていうのではなく、面白いからやるんだ。自分を決めていないもん。

——しかし研究のプランもおありだったでしょうし。

東畑 見方だけはね。朝鮮はね、だからまとめたんだ、大川君(大川一司)とね^(注1)。それから台湾もやることになっていただけだね、途中でもう嫌になっちゃってね。それであの川野さん(川野重任)に行ってもらったんだ。川野君と桑原君に。川野君は立派な本を書いちゃってくれてね^(注2)。

——一番よい仕事をされたと聞いています。

東畑 そうそう。処女作にしてベストの本だな。

——その「殖民政策」講座ですけれども、以前、矢内原(忠雄)さんがやっておられた頃は、満州とか朝鮮とかに重点がおかれていたようです。

東畑 やっておられたでしょ、もちろん。

——それで、東畑先生の場合イギリスの植民地論などが主だったように聞いていますが、日本の植民地政策については、講義をされなかったのですか。

東畑 まあ、台湾というのは私がやっていたけれどね。そこまでいってないんだよ、君。植民政

策をやるって、何をやったと思う。何も知らんのだから。わずか数年なんだから。君、たいしたことないじゃないか。非常に興味を持ったことは確かだけだね。

——当時、印象に残っている外国の例か何かございますか。

東畑 いや、それはイギリスだよ。植民ったらイギリスだからね。あとのことは大したことない。だから、イギリスのは植民論沢山あらあね。*The History of Colonization*とか^(注3)。しかし、その植民はね、アメリカとか豪州とかいう植民と、インドとかアフリカとは別ですからね。俺はアフリカやインドの方に興味があって、アメリカなどはそれほど興味を持っていなかった。つまり、支配植民地だね。アメリカや豪州なんかは移住植民地だからね。

——そうしますと、この『日本経済新聞』の連載に書かれているところになるわけですね。「このころわたしが注目したのは日本の海外移民であった。満州移民は当時盛んに叫ばれ遂行されつつあった。これは正常な経済性のものでなかったのに、余り念頭になかった。それよりも特にアメリカ、ハワイへの日本移民の問題であった」と。

東畑 そうハワイだ。これは日本の移民だから。

——そのあと、支配植民論とは別に移民論というのはどういう事情だったのでしょうか。

東畑 うん。それはまあ、付けたような話だから。

——それで、井上靖さんの小説を引用され

ていますが^(注4)。

東畑 ああ、そうか。しかし、脱線して……。

——はい、これは脱線だと思いましたが。このあたりから、精彩を欠くんじゃないかというふうに読んだんですが。(笑)

(注1) 東畑精一・大川一司共著『朝鮮米穀経済論』日本学術振興会 昭和12年。また同じ日本学術振興会から『米穀経済の研究(1)』(東畑・大川)有斐閣 昭和14年が刊行されている。

(注2) 川野重任『台湾米穀経済論』有斐閣 昭和16年。

(注3) Morris, H. C., *The History of Colonization*, 1908年のこと。

(注4) 『私の履歴書』第20回「兼任教授」参照。

農学部の人々、農業問題、移民政策

——先生が朝鮮、台湾の旅行から帰ってこられて、時代は軍国主義的な要素を深めるといいますか、満州国がどんどん拡張して、戦線が中国北部に広がってゆく。国内では「二・二六事件」とかそういう事件が続いていくわけですがけれども、農学部の先生をしていらして、特に何か印象に残っていることがありますか。

東畑 いやあ、農学部の連中なんかはもうみな君、満州移民だとかばっかり盛んでねえ。それから、まあ、自然科学の先生ってのは、頭が簡単だからねえ。ナチがいいと思ったらもうそればかりでねえ。ほかのこと知らないんだから。だからそんなものは戦犯にならんって言いたかったんだ。他を知って、否定してナチになったんならね、戦犯になるかも知れないけど。他のものも知らずに、行って驚いて、惚れ込んだだけのことで

ね。そんなことは戦犯になるかって言ってやりたくてねえ。田舎もんが、君、初めて見たんで飛びついただけのことで。ひがみがきついって言われたこともあるけどね。考えた話じゃないんだよ。

——加藤完治さん^(注1)とか農業に関係する人たちでいろんな運動が起こってきてますが、そういうものにあまり巻き込まれるということはなかったのですか。

東畑 俺か。俺を巻き込もうとしないんだから。あいつはどしがたいと思っているから。

——那須先生(那須皓)などは割合、積極的に入っていられるようですよ。

東畑 好きだから、先生は政策立てることが。あの人はああいうことが好きなんだ。農林大臣の顧問してるなんていうと、もっとも人生の目的としてたなんてね。いや、俺だって、顧問なんかしたことあるけどさ。だけどそんなものは、まあ名前だけで別にどうのこうのってことは……。

——日本の人口問題の解決はそういう形ではありえないとか、そういうようなことを進言されたことはあるわけですか。

東畑 俺の頭でそんなこと言えるかい。解決とはどういうことなんだっていうこと、これは大きな問題なんだ。俺、えらく叱られたことがあるんだからねえ。農村問題を解決せないかんで、横井先生(横井時敏)がさかんに言われたことがあるんだ。先生に、「解決された農村てのは、どういうことですか」って聞いたならえらく叱られたよ。「でかいこと聞くな」って。「解決されっこないんだから。そんなことないんだから……」って、叱られたことあるんだよ。そりゃねえ、手だてはいくらだ

ってある。貧弱といえども理論通してなら……。でもそんなアホなこと、君、意味がないんだよ。だから割に嫌われたんだよ、僕は。今でもそうだけどね。あまり好かれなかったよ。そういう人見知りせんところがあったからね。でも屈しなかったね。屈しなかったっていうよりもね、俺、そんなに威張ってるわけでないだ。沢山問題があつてね、その方を俺はやりたかったんだ。理論的な問題ね、それやったりゃいいんであつて、農村問題解決するなんて、どういうことなんだよ。まあ、きいてみたまえ、君、自分の頭に。解決された農村てどういうことなのか。答出っこないんだよ。

——前に上野満さんの農場(英城県新利根農場)に伺ったことがあります、僕は3度ばかり伺っているんです。一番最初は先生のご紹介で、満州に行っているいろいろ苦勞して帰ってこられて、というお話でしたけれども。あの当時は本当に、大勢の方たちがいらっしゃったようですね。

東畑 うん、そりゃいいんだよ。あの上野君なんかことにね。深刻に思い詰めてやっていて、自分で実践力持ってやっているからねえ。それはいいんだけどね。そんな君、実践力ない奴がさ、『私の履歴書』に書いてあるだろ、アホなこと言う奴は、どうも農業やっていない奴が言うんだってね。(笑)

——ありました。

東畑 だからさあ、戦後「どうだい」ってね。偉そうなことをきく奴がいたからね。こっちはにやにや笑って、「どうだい」とかってきいてね。

もう弱ってたよ。

——実際に行った人の問題はともかくとして、こちらで送り出す側になっていた人たちの責任ですね。

東畑 そうそう、太鼓叩いてる奴さ。行った連中はねえ、こりゃ責めるわけにはいかんですよ。かわいそう、気の毒だね。大運命に接したんだからねえ。

——いろんな村で分村計画を立てて移民したそうですね。

東畑 これはねえ、太鼓を叩いた奴さ。みな逃げてるだろう。だから加藤(完治)さんだって一言もそんなことは言わないんだから。言いたくはないだろう。俺のやつは間違っていたとも言わないしね、すまなかったとも一度も言わない。むしろ、そうでない僕らの悪口言ってたわけだから。僕は先見の明を誇るわけでも何でもなしさ、関係しなかったんだ。だって、したくなかった。僕もしかして、本当の植民をやってんなら賛成したんだけどねえ。無主の土地を拓いてやってんだったら。どうも調べてみたら、そうじゃないんだ。とりあげたんだ。それでもう、すっかり嫌になっちゃってね。

(注1) 昭和13年より満蒙開拓青少年義勇軍訓練所長。

植民政策と中国旅行

——フィリピンのだバオですとか、あるいはマレー半島、ボルネオ、セレベス島なんかにもどんどんゴム園などが拓かれていきますね。

東畑 まあいい、これは。とりあげたんではないんだから。拓いたんだから。だから、開拓って観念は二つある。本当の意味の拓いたやつと、人のやつを取りあげたってやつね。日本のよくないところなんだよ。だから、義勇軍なんてのは、むこうに行くと義勇隊って直したりね、青少年隊なんかをね、誤魔化したんだ。

——あれは、関東軍との関係で、軍という名前を付けるわけにはいかなかったからですね。

東畑 国内では軍だよ。むこうに行ったら隊だ。で、中国人——満州人に対してもその方がよかった、隊の方が。

——そういう、日本からの植民ということについてはいくらか距離を置いて見ておられたのですか。

東畑 まあ、もっともねえ、2、3年だからね。そんなもんは学問の対象にならんさ。もっとね、10年も15年もたつてくるとね、初めて対象になるんですがねえ。研究って対象にはならなかった。

——「殖民政策」講座を引き受けられるのに、少し躊躇されるというふうなことはなかったわけですか。当時植民といえば、どんどん「満州」へというような事情でしたか。

東畑 いやあ、そんなことは俺に影響ない。世界的にもものを見る者に、何で満州の騒いでることが影響するか。だって大事実なんだから。イギリスや何かが200年にわたってねえ、アフリカの分割が終わったのが1870年だからね。この過去の50年間でいうのは大事実だからな、世界の。一満州のために——そんなもの——みえてないよ。

——満州にいらっしゃるということもなかったのですか。

東畑 行った。行ったけど、1日か2日で帰ってきた。こんなところは、インテレクチュアル・デザートだって言うて。

——それは朝鮮旅行のときではなくって……。

東畑 満州行って、中国へ行っちゃった。大河内(一男)君と一緒にね。

——何年にいらっしゃったんですか。

東畑 中国行ったのは確か昭和17年。俺の弟がおってね、企画院か何かで行ってね。「中国に来いよ。うまいぞ」とかいってね。飯がうまいよなんて言うてたんだけどね。弟のおるところ——兄弟で醜態だ。行かないって行かなかった。弟は帰ったんだ。日本へね。その翌年かに行ったんだ。だからえらいもててね。いろんな人に随分世話になって。

——期間はどれくらいですか。

東畑 北京に10日くらいおったかな。「何しにこられたんですか」ってね。「これから何をしようかと思って、研究しにきたんだよ」って言うて笑って。(笑) 勉強するなら話は違うんで。ちょっと行ってさっとして、報告会だなんて馬鹿なこと、俺、全然やったことはない、そんなことは。

——その報告もお書きになっていないのですね。

東畑 そんなことで行かんもん。お金貰わんから。金は貰ったことないんだ。研究費って、いっぺんも貰ったことない。だけどもう懲りてね。意地張って貰わなかったんです。研究費というのは

戦後は随分貰ってやったよ。だけどみんな人のためだからね。自分で貰ったことはない。

——ご自分で懲りたとおっしゃるのは。

東畑 面倒臭くて、君。何に使ったとかね。俺は文部省から行ったんだよ、学術振興会でね。帰ってきたら、「どこをご旅行なさったんですか」って。一枚の宿屋の領収書があつてね。(見せたんだ) こんな調子だったんで。ビール飲んだんだな。そうしたら「ビールの代は払いませんから」ってこう言ったんでね。それでも俺は腹を立てて、「わかった」って。「なるほど研究にビールはいらない」って言うて俺は300円金持って返しにいったよ。「いらん」って。ああ、向こうは弱っちゃったね。

——そうでしょうね、出した方は。

東畑 俺はもう、そういうことは嫌だっていうてね。

——近衛内閣からは何も、要請とかそういうことはなかったのですか。

東畑 別に何も無いね。近衛公の顔はとうとう見たことない。写真では知ってるけどね。いっぺん紀元二千六百年の記念式典のとき、近衛公はずうっと向こうで天皇陛下にご対面していて、それきりでね。

物価統制と価格

——当時、昭和研究会というのがありましたか。

東畑 昭和研究会は、関係してた。

——三木清さんも参加されてましたね。それから……。

東畑 後藤隆之助。後藤さんはこないだ90になってね、お祝いなんかやって、俺はよう行かなかった。

——分科会は何に属しておられたのですか。昭和研究会はいろんな分科会に分かれていますけれど、名前も変わってきてます。支那問題研究会とか。

東畑 支那問題？ 分科会じゃないよ、まあ一般問題じゃないかな。そう熱心に行ってるわけでもなかったんだ。でも何回か行ったね。純然たる研究会ですよ。

——それで、昭和15年に先ほど言われた物価対策審議会の委員になられた。その前に中央物価委員会ができたのですね。

東畑 そうそう。それが何年？

——それが昭和14年ですね、3月です。それで昭和15年、ちょうど1年たったあとに、物価対策審議会の幹事ならびに価格形成中央委員会委員になられるんですね。

東畑 ああ、そのあとはつまり、これはつまり。それは米内内閣だ^(註1)。

——これは並行してやっておられたんですか。

東畑 いやいや。続けてやったよ。内閣変わってね。米内内閣は何回もやらなかった。2, 3回しか。その前のやつは実によくやったんだ。中央がね。

——この、非常にためになったとおっしゃられるのは特にどういう面ですか。

東畑 それは理屈になってくるけどね。物価とは何ぞやっていう話だよ。

——そういう議論をするわけですか。

東畑 そうそう。一物一価の議論。それは誰も疑わない。現実に一物とは何だってことになるんだね。そうすると日本にはね、やっぱり中小企業の国でね、織物の種類が20万もあるんだ。まあいろんな織物になるけれども、もし普通の織物としたらだいたいね、1万からあるんだよ。それから価格統制をするときは値上げに罰則を、懲罰するんだ。だから罪刑法定主義ってやつだ。そうすると、縦糸何本、横糸何本になるんだな。織物で言や、種類がみなちがっているんだ。20万種からになるんだ。だから始末に負えないんだ。ラムネ、サイダーが2000種類あるんだよ。ところが瓶がみな違ってるんだ。それは、瓶作るやつが中小企業だから統一したものができないんだ。だから一物一価っていうけれども、全部違うもんになってくる。そうするとまた、日本人て奴はその、逃げることうまいからね。1インチに縦糸を25本、横糸50本と、こういうものを作ってるとしても縦糸25本を23本にしちゃう。横糸50本で奴を48本にしちゃうと、びしゃっとそれになるんだよ。罰することができない。罰則さえなければ荒っぽいこと言えるんだけどねえ、それで逃げるんだよ……。それから加工品ってものはねえ、原料(布)と違うんだよ。そうするとねえ、布をちょいちょいと縫って織りにしてだよ、これが加工品ですって言うわけだ。これ本当だよ。人はみな買いたいときだろう。だから物価統制なんてできないんだよ。中小企業ていうのをみるとね、つくづく日本はよくやっているんだよ。それに運賃というものも考えなければならぬ。そうすると日本はね、東京と大

阪を中央の市場にして、物価統制をする。大阪までの運賃となると、岡山県と広島県とは違って来るね。県でやるより仕方がない。ところが県だって非常に不便な所があるわけだ。ちょっと有利だということになると、岡山県の境あたりにこっそり持ってきたり、また広島の方へこっそりと運んでくるとこの方が非常に有利になったり、いろいろそういうことになってきてね。だから経済原論でいうとさ、距離っていう問題、われわれは簡単に考えているわけだ。原論的な意味ではね。現実にあたっていくとね、距離っていうのもね、山越えしてくる距離と海の距離とは違って来るわけだ。そういうデータってのはほとんどまだとれてなかったんでね、どうにもならん。国民というか普通の人間の方がずっと賢いんだよ。胡瓜の値段を1キロいくらに決めるかだって、そりゃ一物一価で結構なんだけれど、質まで決めることはできない。それで大きい胡瓜が出てくる。薩摩芋もねこんな薩摩芋——まずい奴。全部そういうのを食わしていくんだ。追っかけるんだけど、なかなかうまくいかない。物価っていうのは一つだけじゃ駄目なんだから。全面的にしなきゃ物価統制にならないからね。

——統制を始めるための準備作業としてそういうことを研究されたわけですか。

東畑 いや、それを告示するんだから。

——もう、ほぼ同時的に行なわれるのですか。

東畑 そうそう。告示すると翌日はもうちゃんと実施されている。

——社会主義経済というか、計画経済と同

じ問題を抱えていますね。

東畑 そう。ソ連も弱ってさ。一番最初弱ってどうもならなかった。だってそんなものは資本主義（に固有なもの）だって言ってたんだから。（社会主義には）価格や利子はないことになってたんだから。そこでとうとう参って、帝政時代の価格を基準にすると、こうなった。価格メカニズムに負けちゃってね。そんな問題があるとは思わなかったんだな。そういうことでだね、社会主義経済においても価格はいつも必要なんだと、それがなければ何にもできないんだということをやったのは、あれさ、有名な。

——論争がありましたね。あのミーゼスなどの……。

東畑 ミーゼスの前にね。イタリアの確かパローネ。社会主義論をやってきた伝統的な連中は彼の銅像を置けて言ってる。資本主義経済学のコチコチの男なんだから。パローネだったかな、これは訳本があるよ。英訳がある（注2）。……マルキストの唯物史観なんかはみんなやったけど、価格の問題なんかわからないんだ。だからみんな、そういうものは資本主義の範疇であるって言って、のけとったんだ。現実にはぶつかったときに、価格というのは資本主義だけのものじゃないと、選択の標準になるってことがわかったんだ。

——物価委員会はどういうメンバー構成だったんですか。

東畑 それは、君、偉い奴だよ。賀屋興宣（昭和13年大蔵大臣、当時大蔵省顧問）だとか、津島寿一（当時日本銀行副総裁、昭和20年大蔵大臣）だとか、石橋湛山（当時東洋経済新報社取締役社長）もおった

し、俺は一番チンピラなんだよ。一番チンピラ。

——それで幹事ですか。

東畑 幹事はその次のときだよ。それは米内内閣——これはもう事実上ほとんど何もやらなかった。

——当時、商工省の岸信介次官などはどうでしたか。

東畑 岸さんは、満州。俺はそれやっとしてさ、えらいことを、君、やられたことがあるんだ。どうもねえ、物価統制をうんとやらせといてね、民間に。嫌がるんだよ、統制されてる方が。そこに海軍と陸軍が行って闇で買い占めするんだ。一番物価統制を破ったのは陸海軍なんだ。陸海軍が物を集めるのにそういうやり方やってんじゃないかっていう噂があったわけだ。それで聞いたんだ、物価委員会の正式のときに。そういうこと言ってんだが本当かって聞いたところが、山本五十六さ、海軍次官でね、委員だったんだ。「海軍にかぎって絶対にそんなことはありません」とか言って、俺、怒鳴りつけられてね。(笑) 思わずビクンとなったよ。悔しくて、何とかそういうときに逆襲できんかと思ったけど、どうもできなかった。

——当時山本五十六に噛みつく人も少なかったんじゃないですか。

東畑 それで陸軍にも「物価統制して成功したら予算は減らすんだろな」ってきいたんだ。生意気な奴がおってなあ。陸軍の主計局長だ。「陸軍の予算ってものは計画してやっているんだから、余るってことはありません」ってくるからよ、「そんなことは僕は言わない」って言ったんだよ。だから「どんどん要求しなさらいいでしょ

う」って。そのことをどうにもできないからねえ。こんだけの予算でこれだけのことをやるっていうなら、「値が安くなったら、その予算は余るんじゃないか」って俺は言ったんだ。そうしたら向こうは「それを返せとか言うんだったら、それは話が別問題です」って言ってね、やりあったことがあるんだけど、誰も助けないんだ、僕を。偉い人は。

——この、物価統制というのは非常に難しいもので、実行するのはほとんど不可能だというような結論になって、少し見合わせようとか、そういうことはありましたか。

東畑 いや、そんなことはない。かなり追っかけ追っかけながら努力してやるけど、そのことは、こっちはもう、単なる学究から言えば実に面白い問題だと思ってね。価格というのはよくできるもんだということが、非常によく分かる。

——米価問題については、そこで議論はなされなかったのですか。

東畑 あれは昭和17年だからね。それまでは高いときに買って、どうだったかなあ。何段階かの価格を決めておいて、幅を。1割高けりゃ買う。そんなふうだった。だからそれはもうほとんど物価委員会の対象にならなかった。面白いんだよ。しまいには鰻までやろうってことになって……小さい鰻ね、1匹ちょうど10グラムぐらいの鰻ね。同じ値にするわけにもいかないじゃない。何匹だったらできるというわけにもいかないからね。生き物の値段まで価格統制しようとした。これも失敗だったろなあ。生鮮食料品てのは古くなったら安くなるんだから、決めようがないんだよ、

そりゃ。

——強引に戦争末期は全部統制に入ってしまったわけですね。

東畑 今でもそうだけねえ。言うだけのことであって、みんな裏をかかれているわけだ。生鮮食料品でもものの価格統制なんてものは、古くなったら意味をなさんのだからねえ。これを価格で、統制価格で表わそうたってなかなかできないもんねえ。ところがちゃんと実際に自然的な場合は安くなって売れてるんだから。

——当時日本は統制経済の実施を手探りでやっていたのですか、それともよその、たとえばドイツなどを見ながらやっていたわけですか。

東畑 いやそれはもう、よその国も見てるけどさ。日本人は一種の完全主義者だからね。細かく細かくやって、やるほど駄目になっていくんだよ。またアメリカくらい大きくなってくるとねえそれこそ一物一価ができるんだね、でかいから。

——しかし生鮮食料品とかについてはどうなのでしょうか。

東畑 やろうとはしない。

——そうですね。農業に関しては特に時間の問題は重要ですね。

東畑 いやあ、価格はよくできてるもんだってことをつくづく感じてね。「価格は俺が決めるんだ」なんてアホなこと言っておった奴がいたがね。

——その頃は革新官僚とかですね。

東畑 従来の連中っていうより、革新官僚のいいところはね、そういうことをやろうとしたもの

に、多少、理論的な奴が多かった。ほかの連中はそんなことは誰も考えもしなかった。

——やはり中央物価委員会なんかも革新官僚がリードをしていったのでしょうか。

東畑 いやそれはね、高橋亀吉さんの功績ですよ。役人と2人で共同して原案をどんどんどんどん作ったんだ。それは大功績ですよ。

——そうですか。町の評論家だとばかり思ってたんですけど。

東畑 うん、町の評論家だ。その原案を作るのにだ、高橋さんを起用しちゃったんだ。また、あんなだけ詳しい人はなかったろう、現実に。高橋さんの大功績ですよ。

有機化学、そう有機化学の委員長してたんだ、俺。で、一番大きな問題はパルプの値段を決めることだね。よく覚えているよ。1ポンド16銭1厘とかね、2厘とかっていうのを、何厘まけるとかなんとか。王子製紙の社長さんさ、そのとき高島菊次郎さん^(注3)という人がおって俺、行ったことがあるよ。夏休みに。高島さんとやり合ったんだよ。王子製紙の社長室に行っってね、まけろって。1厘まけるっていうと、100万円くらい値が違ってくるんだ。製品の量が多いから、王子製紙はね。何か知らんけど、「そりゃたった1厘じゃないですか、なんでもないじゃないですか」って言うよね、「そんだけやるって、100万円くらい違う」って言われてね、非常に楽しくてね。2度ばかり行ったかな、高島さんの所へ。

ところが、アジ研にきてからだったね。朝日新聞が電話をかけてきて、『朝日ジャーナル』さ。高島さんがね、これが昔の古武士みたいなどころ

がある人で、いろいろ話を聞きたいんだと。それで、「座談会をやるなら東畑さんがいい。東畑さんとなら話をする」って言ったって。僕にさ『朝日ジャーナル』が「どういう関係ですか」とか聞いて。「どういう関係というか、高島さんまだ生きてたんか」ってわけだね。(笑)「そりゃ僕も会いたい」って言ってね。それで話したことあるよ。『朝日ジャーナル』にそれが載ってる(注4)。するとすっかり覚えとってね。俺はもう、高島さんて人は全く死んだ人だと思ってたから健在で、「本当に久しぶりですなあ」って言って。

そんなもんしゃべってたらいくらでもいろんな話があるよ。話が尽きない。

(注1) 東畑氏は昭和14年3月に中央物価委員会委員に任命されたが、米内内閣(昭和15年1月～7月)成立後、昭和15年4月に中央物価委員会は解散となった。同月に氏は新設の物価対策審議会幹事ならびに価格形成中央委員会委員に任命されている。

(注2) Enrico Barone (1859～1924年)による論文“Ministro della Produzione nello Stato Collettivista”(1908年)であろう。これは、F. A. von Hayek 編, *Collectivist Economic Planning*, 1935年に英訳されている。邦訳は迫間真治郎訳『集産主義計画経済の理論』実業之日本社 1950年に所収。

(注3) 故人、高島菊次郎。生年明治8年、没年昭和44年。

(注4) 「対談 事業の心・農の精神」(『朝日ジャーナル』1963年1月6日号)。

1978年7月3日

戦争前夜

——この前は物価統制などの話を伺ったものですから、できましたら戦争の時期の問題

についていろいろ伺いたいと思います。戦争そのものは「15年戦争」といわれています。昭和16年の12月8日に始まったというよりは、ずっと中国で続いていたわけですから。

東畑 もちろんそうだけだね。それは、あとの話であってさ、誰もそうは思っていなかったろう。大東亜戦争ってのは、するかしなかったっていうのは一部の人の決めたことでねえ。

——アメリカに留学された経験のある方は、その当時どれほどいらっしゃったのかわからないんですけど、先生などは、知米派ということで……。

東畑 知米派も糞も、そこまでは考えていないけどねえ。まあ常識でいってね、アメリカと戦争するなんて、人は考えなかったろう。昭和14、5年頃ね、アメリカの国防力を調べた連中は大体みな否定的な考えだった。

——日中戦争が膠着状態になったので、ひとつその局面打開の意味で一時的にアメリカと戦争を始めて、1年くらいうちに講和条約を結ぶというような構想で、もともとアメリカと全面戦争をするというようなことは考えていなかったと聞いているんですが。

東畑 誰も考えなかったって、それは君、全面戦争になるのが当たり前だからやめておけて意味だよ。(笑)俺はもうやめたって言ったって誰がきくもんか。西洋人からすればね。それは、うますぎる話だよ。日本のほうでそういう考えがあるとすれば。シンガポールはとったから講和を申し込みにいくたってね、誰がきくもんか。これからだっていうんだ、向こうはね。

——「大東亜共栄圏」という範囲はあまりこう明瞭に決まっていなかったようなんですが。

東畑 要するに資源獲得運動なんだからね。一番欲しかったのはインドネシアの石油、オランダのね。それと食糧だよ。つまってきたんだよ、いずれにしたって、日本が。それ以上、大戦争やろうなんてことは、常識的に考えなかっただろうしね。

——「大東亜共栄圏」内部での農産物の自給計画っていうことは、先生なんか真面目に考えられたんですか。

東畑 俺、そんなことやったことないから全然知らないけどね。問題はね、政治と戦時で秩序が乱れていたときにはね、現物ができても収穫することができなとかね、集めることができないとか、百姓が隠したりとかでね、生産力っていうものが激減するんですよ。たとえばね、フィリピンでも、砂糖の生産量が半分以下になったかな。そんなことないって怒るんだよ、軍人は。そこまで減ってるわけじゃないんだけど、把握する力ってものがなくなっていくもんだから。

日本だって、昭和20年ね。これは大変減ったんですよ。前年にくらべて、2000万石少ないんだからねえ。5800万石あったのが、3800万石っていう、そんなことはあり得ないんですよ。そうは減ってない。だけど政府が握めるものはそうだった。だって百姓は言わないんだから。そういうもんでね、日本の考え方としては、非常に暢気なんですよ。どういう意味で暢気かっていうとね、食糧が相当とれるようになったんですが、それは肥料もフルに使える、労力もフルにある、輸送機関もフ

ルにある、そういう前提で、やっとかさできとるもんなんだ。ところが戦争になりますとね、労力が激減してくる、交通機関が駄目になってくる、そして、とれる物もとれなくなるし、とれても、手で握ることができないと、そういう意味のことは考えていなかったんだ。暢気だね。日本が自給を急ぐってのは大失敗なんですよ。あらゆる力を全部注いで、緊張のかぎりでも多少は自給できたわけなんだ。ちょっとそれが乱れたら、ガッと減ってくるわけですよ。そういう点で非常に暢気なんですよ、考え方が。

真珠湾攻撃前後

——戦争前夜といいますか。昭和16年の後半ですけども、何かそういう兆しを感じられましたか。

東畑 それはもう、みながいろいろごそごそやってるんだからね。

——当時は日米交渉がずっと続いていましたか。

東畑 そうそう、うまくゆかんからね。そのうちに考えつく。だからその当時のね、企画院ってのがあったんだ。星野直樹がね、独断でもって、何百万石の米穀を輸入したんだ。「戦争になったら、足らなくなるに決まってる」ってね。そのあとは輸入できないから、やっぱり星野は偉いよ、そういう意味ではね。これは亡くなった。

——真珠湾のニュースが入ったときはどうでした。

東畑 喜んださ。喜ぶのは確かなんだよね。どんちゃん騒ぎ、ウァンウァンやってね。

——大学ですか。

東畑 どこでもさ。日本中、君、もう、うだっちゃったんだから。真珠湾は、多少くすぐったいんだよ。不意打ちだからねえ。それよりも本当に喜んだのはマレー沖のプリンス・オブ・ウェールズとかレパルス。これをやったろう。これは堂々たる戦争なんだからねえ。まあとにかく、戦争準備にいろんなことがあって、空襲があるから暗くしろとかねえ。それで幕を張ってさ、そんなことは随分やってたんだよ。

地図をね、アホな話なんだ、参謀本部の地図を焼けとかね。なんでだって言ったら、日本にアメリカが上陸したときはそれを使うと困るってこういうんだよね。なにを言ってやんだって。俺はアメリカに行ったときに、沢山、もう日本の地図は全部集まってんだから、国会図書館にねえ。で、俺の所だけ焼かなかったんだ。俺が農業経済の主任してたから、僕の部屋に置いとったけど、焼かなかった。

びっくりしたよ。俺なんか何も知らなかったんだ、その日も。12月になると、伊勢からいつもね、伊勢エビを沢山送ってくるんだよ。で、伊勢エビがあるからって言ってね、その前の日に我妻栄君夫婦呼んでさ、親しかったんですけどね、伊勢エビの美味しいやつを食ったりしてさ。それで別れてさ、家におったら翌日になってね、うるさいんだ。ギャーギャーギャーギャー、ラジオやってねえ。そしたら子どもが男の子1人なんだけど、学校から帰ってきて「戦争始まってんだぞ」とかって言ってね。「勝ったぞ」とか言うんだよ。「どうしたんだ」って言ったら、「アメリカと戦争し

はじめた」こう言ってね。それでラジオをつけてびっくりした。

——じゃあ、それまでは。

東畑 昼頃だよ、俺が知ったのは。ラジオやなんかでワンワンワンワンやってさ。街には号外があったり、出したりしたとかは知らんけどねえ、僕の今の中野のところには何もきやせん。隣近所でラジオをやったのがねえ、東條の演説とかそういうことばかりだ。こりゃいかんって言ってね、それで僕は、学校側の主任、経済の主任をしていたからね、昼飯食って学校へ行ったんですよ、大学へ。それで、いろんなのを片付けたりなんかしてね。

——本もですか。

東畑 うん、本も。で、夕刻に帰ったんですけどね。もう電車は暗いわね。

——灯火管制。

東畑 もちろん灯火管制でね、それでお茶の水で乗ったんだけどね。1人としてもものを言う人はなかったね。やっぱし日米戦争になったから、しゅんとしてしまっ。だいが中国との戦争と違っちゃってねえ、深刻な顔してね。中野駅に降りて家に帰ろうと思ったら、道に箱が置いてあってね、それにぶつけてさ、足を。真暗でわかりやしないんだから。こけて少し怪我してね、うちに帰ったのを覚えてるけどね。しかし……みんな、ぐーっと締めつけられたような感じなんですけどね。おおいにやったと、ハワイね。まあ不意打ちなんだ、これはね、あんまりよくないけどね。日本はそういうことを、しかしよくやったんだな。日露戦争のときも。それで天下は、君ねえ、わーっと

喝采したわけだよ。で、アメリカの太平洋艦隊を全滅したとかって報道になってね。

そしたら、3日くらいたってからさ、プリンス・オブ・ウェールズだ。これは全滅させたとか言ってるね。僕は、大学で植民政策のゼミナールをやってた日だったな。そしたらそこへそういう通知がきて、いやあ、やったねって言って。で、俺、コーヒーでもおごるよって言って、10人ばかりでコーヒー飲んだことがある。

——日中戦争に非常に疑問をもったり、反対したりしていた人たちも「大東亜戦争」の日は非常に感激をして、アメリカとの戦争なら全面的に戦えると思ったわけですね。

東畑 支那事変でものはね、腐ったようになってさ、もじもじもじもじして何としてももうまういかなしいね。それでなんかぐずぐずぐずぐずしてるからさ、それがさっぱりしたって気持ちなんだよ、みんな。まさかそこまでいくとは思わなかったのにいっちゃったんだからね。決着したんだよ、そのもじもじした疑問だとかなんかがね。話がすっかり戦争になっちゃったんですから。

——たとえば、尾崎秀実ですら、その日米開戦の日には、重く垂れこめていた雲が全部取り払われたようなある一種の爽快感を感じたといっています。

東畑 もやもやもやもやしてたんだよ。それが決着ついたってわけだね。それは、やってみたら勝った。あとはもう調子に乗った話になって、講和条約の条件だなんていってね。勝つことを前提にした条件でさ。アメリカの西海岸は鉄鉱床一揃えを日本に譲るとかね、そんなアホな話なんだ

から。

——早速そういう話が出たわけですか。

東畑 そらあもうしばらくたってから……官吏はやることないもん。戦争遂行だけですからね、全国をあげて。

——大学の雰囲気はいかがでしたか。

東畑 普通の授業をやってるから、そこまではあれじゃなかった。

——特にその日から何か新たに変わったことがありましたか。

東畑 いや、学生はまだあんまり出征してなかったな、そのときは。昭和16年はね。そんな、物資も、むやみに不足する時期でもなかった。戦争をひしひし感じたのは、もう、昭和17年、18年……。17年だったかなあ、翼賛選挙をやったのは。

——昭和17年です。

東畑 そのときにはもう、ドゥーリットルやつがいて、船から飛び出して爆弾落としたんだね。あれは4月か5月だよ(注1)。どっか東京へも落としたんですよ。10機ばかり飛び出して、それでみんな、中国大陆の方へ逃げたんだ。ドゥーリットルって奴がね。それで日本はびっくりしちゃった。

(注1) 昭和17年4月18日、米軍のドゥーリットル中佐がひきいる爆撃機隊が東京、横浜、名古屋、神戸などを爆撃する。

翼賛選挙——蠟山政道氏の応援

——総選挙をやったのは日本だけなんだそうですね(注1)。

東畑 フランスも選挙やったよ。翼賛総選挙や

るっていつてさ。そのときはもうミッドウェーは出たのか……ミッドウェーはいつだい。

——ミッドウェーも昭和17年です(昭和17年6月)。

東畑 ドゥーリットルでやつがきて日本にとにかく爆弾落としたんです。たいしたことじゃなかったんですけどねえ。なぜよく覚えてるかっていうとね、翼賛選挙に蠟山政道さんが出たんだ。

——推薦されてですか。

東畑 いや、推薦を受けなかったんだけど、いや、受けたかしらんけど、いっさい彼はあれを断わって、自力でやるっていうんだ。俺は選挙に出られることは反対していたんだ。あの人はそんな人じゃないからってね。だけどまあ出られるといえば仕方のないことだね。友人連中が行って選挙演説して歩いたんだ。ところがね、その、ドゥーリットルがきて、その日は禁止になったんだ、集会が。それで、やれなくなってねえ。

——東畑先生も一緒に応援演説などに行かれたんですか。

東畑 おお、そりゃもう、蠟山さんと関係あるし、親しいから。

——何日間くらい、まわられたんですか、期間は。

東畑 いや、そんなに長くは行ってないですよ。行って2、3日ほどで、帰ったんですから。

——当選されましたか。

東畑 そうそう。翼賛選挙からくるのは、お金もお断わり。応援弁士も断わってね。学者ばかりなんだよ。だからねえ、どっかでね、司会者が言ったよ。普段にこういう偉い先生の講演を聴く

と何百円ぐらいかかるといふんだ。「今はタダなんだ」っとか言われてね。(笑) それでそのときに翼賛選挙で当選しなかったり、推薦を受けなかった奴が5、6名あるわけだ。鳩山一郎さんはそれです。彼は自由主義者だったから。それからね、安部磯雄さんもそうだね。

(注1) 翼賛選挙——昭和17年4月30日。

比島調査委員会

——フィリピンにいらっしゃったのはいつごろでしょうか。

東畑 戦争が昭和16年に始まって、17年。調子よくいったんだけど、ミッドウェーでひっかかってねえ。18年だからね、うん、フィリピンから帰ったのが。

比島調査委員会の委員^(注1)になってくれっていう話が、北京から帰ってきてからなんだから。北京は夏休みの終わり。

——そうすると昭和17年に北京に行かれて、その秋に比島調査委員会ができて、参加されたわけですね。

東畑 いや、委員にはなったんですけど僕はいけなくて、翌年の3月に行ったんですよ。僕だけ遅れてね。その年にフィリピンは独立国になったんだよ。

——それは、昭和18年です。

東畑 17年の暮れに、村田省蔵さん^(注2)が、どうしてもやってくれないかっていう話になって。それでもう決まっていたんですよ、行く人はほとんど。村田さんの考えは非常にいいんだ。つまり、金持ちと貧乏人しかいないって社会なんだから。

植民地は大体そうだからね。それでは独立国として意味ないと。だから中産階級を造成するっていうことが、一番根本問題なんだと。その方途について必要なだと、研究することが。こういう委員会なんだ。村田さんの見識が広いんだよ。日本だって、皆そうなんですから。殿さんとお百姓じゃ、国にならないからねえ。どうしても中産階級を作らなきゃいかん。中産階級作るって、要するに産業ができてきてね、産業の戦さってものがないければ中産階級はできないわけだ。近代産業を創らなきゃね。

——当時ですね、マレー半島に東京商科大学の赤松要さんが中将待遇で、軍政のために行かれたのは。

東畑 一橋大か何かやったね。あれはね、その土地へ、みなそれぞれの土地に相当な人が、顧問か、最高顧問でいったんだ。フィリピンは村田省蔵、それからマレー半島は徳川義親だったかな。小川豪太郎がビルマにいったからね。そういう人びとがみんな、そういう所に行かれたんだ。そういう人の発意でやったから、みんな同じようなことをやったわけじゃないんだ。

そうそう、商科大学はね、あれは苛められたんだよ。商業とはけしからんという考えだから。だからあれは東京産業大学になったんだよ、一時。東京産業大学ってのは何年間か続いたんだよ。商業っていうのはユダヤ思想でけしからんってね。何かしらんだけどね、常識が違ってたんだからね^(注3)。

——そうすると東京大学の方が主としてフィリピンを担当したわけですか。

東畑 そんなことはない。全然そんなことはな

い。東大は何ら関係ないです。だから、末川さん(末川博)なんか東大でなくて京都大学だろう。蠟山さんはもう東大にはいなかったんだから、その頃。あの河合榮治郎事件^(注4)で東大やめて、代議士していたんだ。大島正徳は文部次官なんかしてた人ね、それもいたし。杉村広蔵って、これは一橋大と喧嘩してやめた。

——東畑先生の助手という方は。

東畑 ああ、林純一君っていったんだ。それから馬場啓之助君でいてね、連れて行ったんだよ。これはよくやった。俺は馬場君って人を発見したんだ。それで、農総研に引っ張ったんだ。一橋大から馬場を抜いてきやがったっていわれたんだ。俺、人物に関心があるからってね。だから中山伊知郎が一橋の学長になる前、「俺がなったときは馬場君を譲ってくれ」って。で、中山が学長になったときは農総研にいたんだけど向こうを本務にしちゃったんだ。

そんなことでフィリピンは、みんなは暮れに行きましてしばらくおって帰ったのかな。僕は3月末に行きましてね。そのとき蠟山君と一緒にだったな、確か。いや、杉村(広蔵)と一緒にかな。3月末に行って5月初めに帰った。夏休みになって8月末頃にも行った。10月の初めに独立の式典に参加して帰ったんです。この帰ったときにだね、学徒動員でさ、学生いやせん。農業経済なんて人は、みなひっ捕えられちゃってね。残った人がいたがね。足の悪い男だったからね。その頃からひしひしと戦争になってきたんですよ。

——フィリピンでは調査をされたわけですか。

東畑 文献調査を主として。それとね、質問やなにかした。フィリピンの人、50人くらい動員してたかな、学者を。そういう人にも、報告書を書いてもらったりなんかしてね。土地制度なんかはなかなかいいものがあった。

逋信省の秋山龍君^(注5)が村田さんの秘書って形で比島調査委員会の幹事役をしていたんです。それで委員が、蠟山、末川、大島、杉村、伊藤(兆司)、それに、僕、助手が6名と、事務所をおいてそこでどんどん勉強をしていた。

——フィリピン側の代表はどなたですか。

東畑 代表というものはなく、いろいろな人が沢山いた。大学教授あり、大学総長ありで、そういう人、みなに頼みましてね、報告書を提出してもらった。委員会にきてもらって、話を聞いたりなんかして。だから、普通の委員会と何も変わりはなかった。

——軍政幹部との関係はどうでしたか。

東畑 軍のほうはね、和知鷹二、これはなかなか痛快な参謀長だった^(注6)。副参謀長が宇都宮(直賢)大佐。和知さんは少将か中将ですよ。この人たちはすっかりフィリピンに惚れ込んでしまっただけ。だから戦犯にもならなかったと思う。フィリピンのために全力を尽くした人だった。宇都宮という人は駐在武官でした。この人は文人軍人で「戦争に負けたおかげで、私は女房といっしょに結婚記念日を迎えられるですよ」と言っていたね。その人たちが主で、あとはまあ……。参謀っていったって変なことはやらなかった。

(注1) 村田省蔵最高顧問を委員長として蠟山政道(統治)、末川博(法律)、大島正徳(教育)、杉村広蔵

(経済)、伊藤兆司(農業)、東畑精一(経済)をメンバーに昭和17年秋に結成された。

(注2) 村田省蔵。昭和17年1月比島派遣軍最高顧問に就任(65歳)。昭和18年10月にフィリピン独立後は駐比特命全権大使に就任(生年明治11年、没年昭和32年)。『村田省蔵追想録』大阪商船株式会社 1959年のなかに東畑精一「マニラの村田さん」(107～111ページ)の追想文がある。

(注3) 昭和19年9月に東京商科大学は東京産業大学に改称となった。

(注4) 昭和13年10月河合栄治郎東大経済学部教授著の『ファシズム批判』、『時局と自由主義』等が発禁処分になり、翌年2月起訴された。

(注5) 秋山龍。昭和18年10月フィリピン独立後、村田省蔵が特命全権大使となり秋山氏は一等書記官として引続き在任。のち運輸省次官、日本空港ビルディング社長に就任。

(注6) 和知鷹二。昭和17年2月から昭和19年3月まで第14軍(フィリピン方面)の参謀長をつとめる。

村田省蔵比島派遣軍最高顧問のこと

——この委員、6名の方というのは、みな村田省蔵さんが個人的によく御存知だった方ですか。

東畑 個人的に知っていたというより、まあ、いろいろな所で聞いたのでしょね。恐らく、その当時、村田さんと一番親しかったのは僕でしょう。

——東畑先生は、いつ頃から村田さんを御存知だったのですか。

東畑 あれはね、僕の親戚に村田さんと親しいのがおってね。その関係も一つあったし、特によく接触していたのは物価委員会かな。村田さんは物価委員会にも関係していてそれでよく会ったね^(注1)。村田省蔵さんって人は、なかなかそれはた

いた人で、実業家らしくない人でね。金はようたまらんかったし。晩年は中国。もとは大阪商船において、重慶におったですよ。重慶の駐在員だった。村田さんは中国から言っても非常に大事な人です。

——戦後ですね、それは。

東畑 もちろんそうなんだけど、しかし村田さん自身は若い頃からですから。昭和の初め頃かな、重慶にいた。大阪商船が中国貿易を担当していたのかな。村田さんも、フィリピンには受けのいい人だったね。まあ、人柄からいってもそういう人でね。それはもう実に淡泊で質素な人でね。国交が回復してからね、フィリピン大使までなったのだから。行李三つくらいでね、行った人で。なかなか簡素な人でした。だからさあ、岩波の、ハイカラな奴らが、日中国交回復とか何とか言う奴が、村田さんが亡くなったとき、僕の所へきて村田さんの思い出を書いて下さいと言うので、『世界』に、それで書いてやったよ(注2)。俺なんか役に立つんかいと言ってやったよ。

——全面講和とか、あの頃『世界』は非常に勇ましい論陣を張っていましたからね。

東畑 ずいぶんみな、ハイカラな奴がでてきて、僕なんて、もう、問題にならなかった。(村田さんの葬式は)花輪が三つくらい立っているだけのきわめて簡単な葬式だった。ああいう地位の人では、めずらしかった。

(注1) 村田省蔵氏は、当時大阪商船取締役社長、貴族院議員。昭和14年3月、中央物価委員会委員に就任。その後近衛内閣で逓信大臣兼鉄道大臣に就任(昭和15年7月)。

(注2) 『世界』1960年5月号所収の「村田省蔵さ

ん」。

比島調査報告

東畑 それで、比島調査委員会というのは、一生懸命やって、報告書というのを作った。2冊ありますよ(注1)。

——それがどこにもないんです。国会図書館にも入っていません。

東畑 ないさ。それは、送ってよこしたんだ、みんな委員の所へ。マニラで印刷したんだから。

——それはガリ版ですか。

東畑 いやいや、本格的に印刷したのだけど、活字がねえ、少ないものだから、見出しと章と本文もいっしょくらいの活字で刷ってね。よく刷ったと思うんですよ。それを送って寄こした。確か、委員6人と助手に送って寄こしたのだよ。それをね、俺は奪られちゃった、GHQで。村田さんの戦犯裁判で必要だと言うことだね。それで受け取り書かしたんですよ、借用証書を。しかしとうとう返さないんだよね。林君という、僕の助手がいたのだが、それに「林君、君はいらないんだから俺によこせ」と言って取り上げちゃった。それで僕は持っているんだ。製本して持っているよ。これは面白いですよ。これは、英訳することになったのですよ。蠟山委員長の意気込みが浸透していたね。

1899年に、フィリピンはアメリカが占領した。そのとき、やはり比島調査委員会というのができてね。のちに大統領になったタフトが委員長できてね。(メンバーは)みなフィリピンの本を書いている人が多いよ。その調査委員会が報告書を出した。それは非常に立派な本です。それに負け

んものを作ろうと言ってね。それで、民族のことから、教育のことね、法律のこと、憲法のことはもちろん、政治のこと、経済のこと、農業のこと、よう勉強したよ。だから俺は、1カ月間というのは実によく勉強してね。だけど頭はもう働かないのだよ。午後になると暑くてね。朝早く起きてね。6時ごろ起きて、午前中だけ。それで一応、フィリピンというのを頭に入れてね。帰ってから、東京で多少調べ物をしたのですわ。今度は8月に行つて、報告書を書き出したんだ。

——執筆は現地でされて、置いてこられたのですね。

東畑 そうそう。

——今それはどこで見ることができるでしょうか。

東畑 マニラの大使館にあるかもしれない。大使館がコピーとったんですよ。

——『私の履歴書』に、報告を参照してもらうしかない、とあるのですが、前からこれは幻の報告書と言われていますね。

東畑 幻の本だから。でも委員の誰の所へも送ってきたにちがいない。けどもう乱れてね、交通、輸送関係が。フィリピンのマニラでも空襲警報になったことがある。

——東畑先生はどれくらい書かれたのですか。

東畑 俺は、経済の部分を半分書いた。半分は杉村さん。

——『国家学会雑誌』に「比島人の経済意識」(注2)を書いておられますね。

東畑 その本の第1章だった。

——未完のままですね。

東畑 そうですか。フィリピンのやつには完成しているんだ。短いんだけどね。エラボレイトしたやつを『国家学会雑誌』に出したんだ。

——ところがですね、『国家学会雑誌』を見ようと思って、東大の総合図書館へ行つたのですけれど、そここのところが欠番になっていまして東大にもないのです。

東畑 そうか。僕もね、(1)(2)と書いたんだ。(3)は空襲中に書いていてダメになっちゃって、やめちゃった。(1)(2)とだいぶ時間もへだたって書いてね。(2)が俺のところになくてね。

——(1)は大学にもあるんですが、(2)がないのです。……当時、むこうの、たとえばラウレルとか、要人とお会いになりましたか。

東畑 そういう連中とはもちろん会っていますよ。それは君ね、軍人さんよりはまだいいところがあるからね、僕らは。

——ラウレルなんか、自身が法学者ですからね。

東畑 ええ、そうです。われわれは荒っぽい軍人とちがって良いところがあったからね。だけどそのなかでは、今の和知さん、宇都宮さんなんかは軍人と言っても非常に良い人たちだったね。それからね、当時の司令官だった人は面白い人ですね。陸軍中将だった。司令官が、これは負けるよって言ってゴルフばかりやっていたんだ。えらい軍人がおもったんだがね。こうやってここで話しているのとちがって、公の席でそういうこと話すんだからね。「東畑さん、一杯飲もうよ」なんて言われて、よくお相手をさせられたんだ。

わりに近くにおってね、司令官の官邸とね。良い人でしたよ。息子は、軍人にしていない。東大の法科へ行ったけれど。もう亡くなりました、その人は。

（注1）比島軍政監部『比島調査報告』（極秘）のこと。第2篇 統治（149ページ）の写しはアジア経済研究所図書資料部に所蔵されている。昭和18年9月に出版され、約1000ページにおよぶ大冊であった。

（注2）「比島人の経済意識(1)(2)」『国家学会雑誌』第58巻第4、8号 昭和19年4月、8月。

フィリピンの体験

——東京からマニラにいらっしゃって、全体としてどんなふうに思われましたか。戦争そのものは司令官が言うまでもなく、駄目だということをお感じになったわけですか。

東畑 まだ、レイテにきてなかったですからね。だけど、もう、押されていることは確かだった。押されて、押されてね。

——負けるというふうなことを感じるようになったのは、いつごろですか。

東畑 だいぶあとだねえ。戦争というのはわけのわからんものだからな。情報が無いんだから。味方の情報しか入らないんだから。

——あの、朝鮮、台湾、中国と行かれていくわけですね。それと比較して、フィリピンはいかがでした。

東畑 そう言うなら日常生活は楽だね。衣服が第1いらんし。台湾についても、僕らは日本語で書かれた部分以外は知らんからね。フィリピン人ってのは、そんなに反目的でもなかったね、その頃は。

——独立直前ですからね。

東畑 そう。それであと逃げる時の話が問題になったんだ。僕の行ったところはそうでもなかった。ただ食べ物^{モノ}が非常に違うんだ。悪食になるんじゃないかな。ゴボウを捕虜に喰わすとか。軍隊というところ、食物の研究なんか何もしていないんだよ。みんな採ってきてね、醤油で煮るんだよ、野菜なんか。100度でしょ。油だと200度だ。ただ繊維が壊れるけど。豆を喰わしてもそのままでくるっていうんで怒っているんだ。非常にサイエンティフィックでない。相変わらず日本式でやろうとしているからね、食物もね。

——当時、綿花を植えて、綿花自給化計画をやろうとしましたが、結局駄目でしたね。砂糖の方も同じようになったのでしょうか。

東畑 あのね、俺、ここに寄付した本があるんだよ1冊。『比島の開発計画』という経済の厚い本だよ^(注1)。

——いつごろ出た本ですか。

東畑 僕がフィリピンにおったところに。ふきだすような暢気な計画案だよ。こういうものを計画書という好例であると裏表紙に俺は書いてやったんだ。図書館に入っているはずですよ。

——比島調査委員会は諮問機関だったんですか。報告書だけ出して、あとは解散というふうになったのでしょうか。

東畑 問題はこうだとそれだけ。報告書ができて司令官に渡して、それで帰ってきたんです。

——独立式典^(注2)はいかがでしたか。記憶はあまりないですか。

東畑 いや、独立式典は堂々とやっていましたよ。大統領はラウレルか。随分、人が集まっていた。それで、独立させた瞬間に日本の旗を下ろし、それで司令官は直ちにラウレル大統領を表敬訪問するという風に儀礼を尽くしたわけ。僕なんかが大学で、高等官1等。高等官1等は陸軍中将だったけど。2等は少将さ。そうだったものだから弱っちゃったんだよ、フィリピンの陸軍は。陸軍中将は1人しかいないんだから。そうすると、そのほか、何人かの陸軍中将が隊にいることになって困るって。「いいよ」って言ってね、「俺、行きたくないよ、そんなところに」と言ってね。フィリピン人が俺を招待してくれたんだ。自分のところの家族の席があるからと言ってね。だから、そこへ行こうと言ったら、参りやがってね。まあ、そんなこと言わずに、末席でいいからと言ってね。俺は陸軍中将を振り回す気はないからと言って、それでやっと奴らは納得しおって。役人なんかはね、祭壇に登ったわけだよ。

——それではヒナ壇のところへ並べられたわけですね。

東畑 ヒナ壇で、随分沢山おるんだよ。

——村田省蔵氏は、司令官よりもさらに格が上でしたか。

東畑 いいや、それは下。何といっても司令官が一番上でしょうけど。まあ、別格だわな。村田さんは、すぐに(特命全権)大使になったからね。そのころはねえ、フィリピンでも日本は負けると思った奴も、だいぶあったんじゃないかな。ラウレルもそうなんだけれど、みな以前から日本とアメリカの両方と手をつないでいたからね。ラウレ

ルの息子なんて、1人は日本、1人はアメリカに行っていた。その日本にきとった奴が、戦後はフィリピンの大使になって日本へきてたよ。まあ、ああいうところはみな複雑なもんだよ。日本人だよ、暢気なのは。なんでも一本調子で考えられるといってるのは。

——日本で独立運動をやっていたフィリピン人に会われることは、あまりなかったのですか。

東畑 僕はアギナルドくらいでさあ。僕が訪ねて行ったこともありますよ。それからむこうでもち上げるのはあれ、立国の志士。

——有名な、着物なんか着ていた志士。

東畑 日本におった。ホセ……、

——リサール。

東畑 そうそう、リサール。

——今はホセ・リサールの記念館があって、そこには日本滞在中の写真なんかもあります。

東畑 日本におったんですよ。今の衆議院議員会館のあるところ。あいつは女好きでね。可愛い女に惚れ込んでね。『リサール』という伝記があります。女の話ばかり。ヨーロッパに行ってもそうですわ。日本には1年くらいしかいなかったでしょ。

——華僑の問題はいかがでしたか。

東畑 それはね、華僑を苛めている場合もあった、たしか墓場なんかを壊していたんじゃないかな。

——やはりそうですか。シンガポールの場合、山下少将が入って行くと同時に華僑を検

問して沢山殺してしまいました。

東畑 それは、日本がやったんでしょう。フィリピンの場合は、日本はあまりやっていない。

——やっていないのですか。

東畑 数は少ない。それから、実業界の偉いのは中国との混血だから。

——そうすると、特別に華僑政策なるものはなかったわけですね。

東畑 マレーシアに比べたら、問題にならない。マレーシアと違って、フィリピン人は混血の方が社会的地位が高かったんですね。スペイン、ポルトガルとかいうか、あそこの人間というのは、子供を生みっぱなしにしないで大事にするんだね。アングロ・サクソンなんだよ、子供を生みっぱなしにするのは。フィリピンでは、カソリックの坊さんがきてて、混血の子供を生むの。それを非常に大事にしていたんだね。それが大体、支配階級になったんだからね。アングロ・サクソンの混血というのは少ないですよ。少ないから教育もしなかったんだな。

(注1) 該当する本はなく、比島軍政監部の経済政策を集大成した渡集団軍政監部『軍政公報』(第1号～第8号、昭和17～18年、邦文、英文)がこれに相当するものと思われる。表紙裏に東畑蔵書印あり。

(注2) 昭和18年10月14日、フィリピンは日比同盟条約を締結するとともに独立宣言をおこなった。

戦争末期の大学

——東京に戻られてから、非常に不自由を感じられるというようなことはありませんでしたか。

東畑 いや、もう、だんだんとそれは。昭和18

年の暮れに帰ってきたんですからね。19年に僕のうちの家族はみな郷里に帰った。

——中野で配給などをもってひとり暮らしですか。

東畑 配給に行ったよ。女中がきておったよ、郷里からね。何もしやせん。古いこと知らんから。僕の娘と、弟の子供が中学生だった。今、慶応大学におる。それとね、小児麻痺で足を悪くした大学生がいたね。焼け出されたときかわいそうでね、俺のところへこいと声をかけた。それと女中と僕と5人で暮らしていた。ちょっと飯が足りんと、その中学生はやせるんだね。娘は女子大学におったんですわ。アルバイトに行ってるもんだから、それで時々、菓子をもらってくるんだよ。それを、ちょっとくれよ、と言ってね。

——大学で、何か圧力がかかってくるということはありませんでしたか。

東畑 それより、全然、かける人がいないんだよ。

——その、「褌」とかいうことは、大学内ではありませんでしたか。

東畑 大学内ではなかった。褌もね、俺はあんなもの何だと言ってね、えらく叱られたことがあるんだよ。真夏にやるというのは、どういうことだと言ってね。褌なんて寒いところでやらなくちゃ、意味がない。夏やったって避暑みたいなもんだとやったもんだから、えらい叱られてね。インチキだと言ってね。真夏に滝にあたったって、第一、気持ちがいいよ、何が褌だってね。日本はそういうおためごかしみたいなアホが多いんだよ。肇国の初めから玄米食っておったとかね、い

ちいち気にしていたら腹が立って仕方がないから、馬鹿だと思っているより仕方がないんでね。

——大学のなかには学生もいないし、農経も経済学部も、特に授業をされることはなくなっていたわけですか。

東畑 いや、形としては授業はしましたよ。

——ごくわずかな学生を相手にしてですか。

東畑 農経は1人か2人かおったんだよ。今のその足の悪い男だとかね。教える元気もないし、教わる元気もなくなったわなあ。

——話は戻りますけれども、昭和17年7月に南方科学研究資源研究員に任命されたとありますが、これはどういうものでしょうか。

東畑 やったことはありますよ。大東亜共栄圏問題ということで、委員会があつて、食料問題なんかもやると言うことになってね。だけど俺は、その人たちの考え方と合わなかったんだよ。どういう意味でそうだったかと言うとね、日本の現状は維持して、他所を抑えるという結果になるんだよ。たとえば中国の生糸。これは、なかなか良い生糸ができてね。それが日本の生糸の邪魔になると言って、中国の生糸を日本が買い占めてね、切断了んだから皆。こんな短繊維にってしまったんだから、綿みたいに。そういうことになれば、日本の生糸は安全だということだね。スリランカの茶は日本に持ってくることは禁止。日本の静岡が困ると言ってね。みんなそうなんだ。何が東大東亜共栄圏だって。これは中国の学生が僕に言うよった。その生糸を切ったときにね、どうしてこれが大東亜共栄圏ですか、とね。

軍や警察と仲の良かったのは橋爪明男君^(注1)。これは頭が良くってね、軍や警保局と非常に仲良くしていた。みなに非常に嫌われたんですけどね。僕に関しては、そんなことはなかった。頭が良い男ですからね。ドイツ語がべらぼうにできてね。橋爪君ぐらいだろ、戦争がすんでから一言も物を言わなかったのは。弁解もしなけりゃ、何もしない。それで2、3年前に死んだ。商売やってたと思いますね。一番その進退はつきりしていたよ、経済学部の先生では。みんな俺は戦争に反対したなんて言っているが、嘘八百が沢山あるんだ。あの本田顕彰が怒ってね、本を書いたんだよ。『指導者——この人びとを見よ』というんだ。実名を挙げて、戦後いかに変節したかということを、ずうっと書いてある。

——教授会の自治というのは、一応維持されていたのですか。

東畑 そうそう。それは戦争が始まる前だね。荒木さんのとき、それははね返したよ。まあ、妥協して妙なことになっているんだがね。それで文部大臣の顔を立ててやったんだね。天皇陛下を非常に利用したんだよ。つまりね、大学の推薦によって大学教授を決め、総長を決めるということだね、おかしいのじゃないか、と。天皇の任命によってやるんだと言うんですね。そういう理屈でね。

(注1) 昭和19年2月東京大学経済学部長に就任。

空襲と終戦

——戦争が終わるまで疎開されるとかそういうこともなく、ずっと中野におられたので

すか。

東畑 ええ、ずっといた。書物を運んでくれた人がいるんです。軽井沢にね。軽井沢に家を借りてね。とうとう行かなかった。書物だけ送ってね。8月15日戦争がすんで、8月17日か18日に、僕は難儀して汽車に乗って軽井沢に行って、貸してくれた人に挨拶に行ったことがあった。「残念ながらきませんでしたけど、誠にありがとう」と言っただけ。

——そうしますと、中野は空襲はなかったわけですか。

東畑 いや、ある。下の方は全部まる焼け。だから一時は火の粉がずいぶん飛んできたんですよ。どういう関係かね、高い所は全部残った。それで東中野の方へ行く所は全部焼けた。まあ、どうせ焼けるもんだっていうんでね。本島君と言うんだよ、その足の悪い学生は。彼に落ちても消すなって言っただけ。爆弾を包んだる包みが落ちてね、ちょうど1畝四方位の鉄板よ。なかなか立派な鉄板が落ちた。それで、防空壕の入口にそれで蓋をしとった。それじゃ、アメリカは相撃ちになるから撃たないだろうってね。(笑)

——そうしますと、書物以外は疎開しようとはお考えにならなかったわけですか。

東畑 アメリカが上陸したら、俺は残ろうと思ったんだ。日本に尽くすと。家へ別れに行ったよ。郷里に行っただけ、娘なんかはみな帰すけど、でも僕はひょっとしたら残るかもしれないからってね。進駐軍、じゃなくて攻撃軍との折衝ぐらい、俺、やろうと思ってね。

——ということは、もうほとんど降伏は避

けようがないというふうに考えられていたのですか。

東畑 いや、そうじゃなくて、戦争するかもしれないと思っただけからね。

——本土決戦ですね。

東畑 ロシアの参戦した日(8月8日)に東京に帰ったんだ。名古屋の駅で10時間も待ってさ。ぎゅうぎゅう詰めの汽車に乗って、立ってさ。まあ汚い話だけど、小便の垂れ流しだよ、汽車の中で。動けないんだから。それでジャーッとやって。(笑)ずっと冷やっこくなってくるんだよ、靴までね。それでも東京へ着くころには、もう乾いているんだよ。

——夏ですからね。原子爆弾のことなどは別に聞かれることはなかったわけですか。

東畑 いや、聞いておったよ。新型爆弾だったって。何かしらんけど、わけがわからん。それはなかなかたいしたことだって。そして、日本はいよいよ降伏することになったって、それは聞いた。

——いつごろ、お聞きになりましたか。

東畑 9日か10日ごろ。あれはしかし、大多数の人がホッとしたろ、降伏してね。それはもう、なんて言っただけ、耐えられなくなっていたんだよ。食う物はないしね。8月14日の晩なんか、もう降伏は決まっているというのに、どんどんどんどん爆撃しやがってね。

戦争中の研究

——戦争中というのは、先生は、勉強は主として何をなさいましたか。

東畑 勉強って、君、よう勉強したんだから、

俺は。

——その間にですか。

東畑 それが、ひとつも頭に残らない。駄目だな、腹が減っている時は。コーヒーが一杯飲みたいと思いながらね。コーヒー飲めるわけないし。僕が一番勉強したのは、つまり、国の回復という問題だな。一国が崩れてね、いかに回復したかという。ドイツの30年戦争の後とかね。ひとつも残ってないね。ずいぶん一所懸命本を読んだんだけど……。ヒトラーが自殺したときに読んでいた本は、それは非常に印象に残っている。エミール・レーデラーって、東大の先生をしていたんだ。レーデラーの *State of the Mass* か。大衆国家論です。ようできた本でね。感心したんですわ。その本はよく覚えている。

——そのときのものは、戦後、役に立ちましたか。

東畑 いや、なんにもならない。皆忘れて、ひとつも頭に残っていないんだから。えらいもんだね。あんまり腹減っていると駄目だ。あんまりよけい食っても駄目だけだね。(笑) 衣食足りて学問忘れるけどね。今はそういうことじゃないのか。(笑)

植民地支配とアジアの独立

——当時、インド国民軍には、アンダマン・ニコバルだけしか与えなかったのですけれども、ともかく一応その領土でもって、臨時政府をつくらせてというふうになったわけです。そういう動きについてはいかがですか。戦後のアジア、アフリカの独立ということと関係

して、全くの傀儡政権だったので無意味だったというふうな言い方がありますが。

東畑 いや、それはね、考えてみれば傀儡とも言えないんでね。やっぱり人望のある連中ですよ、日本が選んだのは。だから、インドのチャンドラ・ボースだって上等な人間ですからね。そんなとき変なのを選ぶほど、日本も馬鹿じゃないですからね。ただ、ケチだったね、領土は。インドだって、あの島やったきりだけだもん。インドネシアなんて言うのは、認めなかったのだからね。独立、認めないだろ、インドネシアは。

——ビルマではアウンサンが反日闘争に転じました。

東畑 そういうことはヘタだよ。日本の軍人政治では駄目だわね。そりゃあ、一枚上手ですわ、あの植民地を、あれだけわずかな人間で統治してたイギリスなどにかかってはね。

——しかし、アジアの多くの国が独立できたのは、日本の、その、非常に悪い意味はあるけれども、とにかく日本の戦争の結果だというふうにも言われています。

東畑 それはそう、ひとつの動機になったかもしれないでしょうね。それは、イギリスの偉いところなんだよ。今日の後進国問題は、やっぱり種を植えたのはイギリスですからね。だから、これは50年たったらわかるよ。イギリスがやったことが良かったか、悪かったか。あとはフランスにしろ、オランダにしろ、どこの国にしろだね、しぶしぶ独立を認めたんだから。イギリスは思い切って全部認めちゃったんだからね。おさえるところだけ、ちゃんとおさえてね。そこがイギリ

スの偉いところですよ。今でも僕は持っているんだよ、問題として。イギリスは撤退ということによって、偉くなっていくということなんだよ。アメリカ独立のときは、撤退して、偉くなるんだ。ナポレオンのとき、ヨーロッパから撤退してさ、大陸から。そして今度は、植民地から撤退することによって、さすがのイギリスだけれど、どうなるか俺は知らん。だけど、50年くらいたったらわかるからね。後進国問題を起こしたのはイギリスですから。

——「殖民政策」講座を担当されていて、たとえば大東亜会議などに対して、なにか意見を求められるとかそういうことはなかったのですか。

東畑 いや、そういうことはない。

——新聞とかラジオでの報道で聞いておられたわけですね。

東畑 いや、あんまり真面目にニュースをきかんさ。少し長い目で見なけりゃ、そういう問題は議論したって仕方がないんだから。

——たとえばビルマは独立させるか、させないかとか、インドネシアはどうするか、というようなことについては、ほとんど学者の意見をきくというようなことはなかったのですか。

東畑 全然ありません。軍がやって、ノータッチでね。人にききにくるぐらいならよかったんだ、ある意味ではね。こっちは、よう答えないけれどね。そんな頭はないんだから。俺は今でも残念に思っていることがひとつあるんです。文部省でね、教育研究所で『日本教育百年史』というの

を作ったんだ、この間ね。その委員もしていたんですがね。日本の軍人教育というところに、全然手をつけられなかった。しかし、下手すると全然わけが分からんようになってしまうから。一体、日本の軍人教育というやつね。ここに、いろんな問題があるのにちがいないんだけどね。それをやったものは誰もいないんだね。『日本教育百年史』のときでも、言ったんだけどね、やらなかったね。日本の軍人教育史ってあるのかね。幼年学校ね、士官学校、陸軍大学校さ。海軍大学校、兵学校ね。

——それから、中野学校というのが中野にありました。

東畑 小野田さんがおったところだろ。そんなものは小さなものだけだよ。長い間にわたってね、一体、軍人をどういうふうに教育したのかということだよ。非常にかたよった軍人をつくった。後になればなるほど、かたよった人間をつくったとかね。

——戦史については非常に沢山の本がありますが、軍人教育についてはないですね。

東畑 それは非常にさびしいのでね。昔の軍人はみな偉かった、という話が随分あるくらいだからね。戦争の前ころになってくともうメチャメチャだ、教育は。アホな教育してた。それが経済のことやってたからね。メチャクチャにしてたんだよ、日本は。

三木清の逮捕と獄死

——最後にちょっと三木清氏のことをお伺いしたいのですけれども。中野の刑務所に拘

留されていますね。

東畑 2度入っているからね。

——戦争末期には……。

東畑 それはあそこにおったんじゃないか。

——池袋の拘置所ですね。

東畑 うん。今は大きなビル(サンシャインビル)になっている。あの辺におって、それで中野に移ったんだ。ところが、その、彼は思想犯やないからな。

——犯人を匿ったという罪でしたね。

東畑 だから割合、そういう連絡が悪くてね。

中野にきてからは、僕が唯一の連絡人だった。

——面会とか、差入れに行っていたわい
けですか。

東畑 面会や差入れというのは、非常に嚴重に制限されちゃってね。思想犯のときはそうじゃなかったんだ。

——中野の刑務所に移ってから面会に行かれましたか。

東畑 なかった。許可を得られない。普通の犯罪人だから。だけど、俺のところへは死んだって
いう通知は寄越した。

——一番最後にお会いになったのは、いつ
ですか。

東畑 それは、3月の末に岩波書店にきて、捕ま
って行っちゃったんだからね。その前、時々や
ってくるんだよ。埼玉県に疎開していたからね。
時々、玉子三つだとかね、餅を持ってくるん
だ。僕のところへ泊ったのかなあ。よくきて
いたんだよ。だから、3月の末だったな、あれ
は。知らなかったんだよ、僕は。岩波からきいて

ね。あ、これはいかんと言ってね。それで僕の弟
(東畑四郎)の同級生だった岡崎英城というのが、
警視庁のなんとか部長でね。岡崎のところへ行
った。なんだ、君ら三木と義理の兄弟なのかって言
ってね。そうだ、と言って。どういうことなんだ
ときいたところが、びっくりしたね、こっちは。
思想犯でもなんでもないんでね。それがやっぱり
最後までたたってね。それだから出してくれな
かったんですわ。

——そうすると、逮捕された後は、誰も会
いに行ったりとかそういうことはないのです
か。

東畑 会った人は、恐らくないと思う。差入れ
みたいのは多少してくれた人はあったけれど。こ
れは非常に感謝しているんだ。会った人は恐らく
ないかな。見た人はあるんだろうけれど。あれは
思想犯でないから、刑務所から言えば、(通常の)
犯罪人だから、(扱いが)違うんだね。

——まあ、戦争が終われば出てくるという
ふうなことは、期待していたのですね。

東畑 そう思ってたけれどね。駄目だった。
思想犯で苛めてやれと思って、そんな題目で捕え
たのか、それはわからんけど。法的にはそういう
ことなのでね。これにはまいったんだよ。どうに
もならないってね。僕の弟は法律はやったから、
多少知っているけれど。本当の普通の犯罪人だか
らね。死んだ日に、俺のところへ通知を寄越した。
朝、電報を持ってきたんですわ。中野の駅に打ち
に行ったら、すぐそこだから持って行けと言われて
持ってきた。俺ひとりおるときだったなあ。ど
うやって入ってきたって言ったら、門があいてい

ましたって。門を閉めるの忘れているんだ、こっちは。台所をたたくんだよ。

——ああ、それは刑務所の人が直接に届けたのですね。

東畑 そう。青くなったね、これには。それで電話も通じやせず、難儀したんだよ。娘のところへ言うのもね。ガタガタになったからね。三木の家に留守番みたいな人がおったんだ。それで、車を借りてきてそれで運んでいったんだ。行って遺骸に会わせてくれと言って名刺を出して、俺はこうこうだって言ってね。検事がちょっと意外だったんだ。俺だったというので。ちょっとお待ち下さいって言って、2時間くらい待たせた。

——そんなにですか。

東畑 体を掃除したのに違いはない。催促したんだけど、ちょっとお待ち下さい、ちょっとお待ち下さいってね。

——普通、刑務所には検事なんかいない。

東畑 なんてか知らん、おったよ。それで会って。そうだ、遺骸を見て帰って、それで留守番に頼んで家まで運んでもらってね。それで僕は、会いに行っただね、午後、大内先生に会って。大内さんなんかが中心になって、戦後の日本の再興委員会なんか作ってさ。それは戦時中に作ったんだ。それで8月15日か、第1回をやろうと言っていたのがあれがあって駄目になって。大来ね。

——はい、大来佐武郎さんですね。

東畑 大来とか並木とかが幹事をしていてね。それであの満鉄ビルってのがあったよ。今もありますね。そこに大東亜省があって、そこへね、大内さんを呼び出してね。大内さんも、もう青くなっ

ちゃってね。それで、こうこうだって。そうしたらようけ三木の家へやってきたのはいいんだが、それこそ『この人びとを見よ』でね。なんだか戦時中戦っていた奴が、急にね、みんな友人になっちゃってさ。ようけやってきやがってね。遺骸を担いで東京中練り歩くってことになって。俺は断わった。三木の家もそうだろうけど、東畑の家でも嫌だって言ったんだ。本当にもう、嫌になっちゃった、そのときは。それこそあれだっていう奴が、ようけやってきやがる。中村君、長生きすると人が悪くなるよ。(笑)

——そうですか。

東畑 この野郎めってね。人がね、ちょっと言うことが信用できなくなってきてね。だってねえ、長かったからね、戦争やなにかの間がね。だからもう、なにも、節操を変えるのはひとつも恥ずかしくないんだけどさ。翌日またコロッとひっくり返って、前にやったことを否定するようなことを言うからさ、おかしくなっちゃってね。

——ただ、遺骸を担いで東京中練り歩くという話は、『三木清全集』にも出てこないですね。

東畑 いや、出てこないです。そんなこと嫌だって、俺が断わったんです。担ぐって言った奴があれなんだよ、慌て者で、みんな右翼になった奴なんだ。なんでも先に立ちたい奴でね。

——まあ、罪ほろぼし、良くとればそういうことでしょうか。

東畑 いや、なんでも先に立って人気をとりたい奴さ。また、事実、その後もそうだったしね。末路いい奴いないよ。やっぱり馬鹿でも何でも一

貫してね、コツコツとやってきた方が。三木君もそうやって亡くなって、多いに功績があるんだよ。それを国際放送しちゃったんだ。ハワイなんかがどんどん。それでその、思想犯やないんだが思想犯でやられたっていうように、ダーッと世界中に拡がっちゃった。それでアメリカも（出てきて）、（内務省の）警保局が崩壊したんですわ。まあ、三木君の功績。功績って言うと、おかしいけどね。

（了）

あとがき

中村尚司

1961年4月、私がアジア経済研究所に就職したときの所長は、東畑精一先生であった。たまたま総務部総務課に配属されたので、当時の所長室（新大手町ビル5階）のすぐそばで仕事することになった。他の新入職員に比べると、日常的に接する機会は多かったが、調査研究に関する話を聴くことができたのは、私自身の研究分野を決めるときであった。

日本にはセイロン研究者がひとりもいないので取り組んでみないか、という話であった。インド研究をするつもりで、この研究所に就職したので、インドへ留学させて欲しい、と私は強く希望した。しかし、移動大使としてアジア諸国を歴訪された体験から、ペイルートの東ではセイロン大学がいちばん美しいキャンパスだよ、と執拗なくらいセイロン留学をすすめられた。私としては不承不承ながら、「シンハラ語の勉強をはじめてみます」と答えたことを記憶している。このとき以来、私はスリランカ研究の道を歩むことになった。

スリランカ研究の押し付けを気にされていたのか、東畑先生はときどき昼食にさそわれ「君、勉強の方はどうだ」ときいて下さった。当時、銀座のレストランには、上衣とネクタイをつけていない客や運動靴をはいた客をことわる店があった。窮屈な服装のきらいな私に対して苦情を言わず、先生は支配人に代用ネクタイをもってこ

させて、その場をつくらせて下さったものである。スリランカのトロツキストの農業大臣（P・グナワルダナ）から聴いた農業改革の進行状況はどうか、などという質問をされていたが、私は不勉強であまり答えられなかった。先生は生涯で1年間だけ、郵便ポストにぶつかっても気づかないくらいに、猛勉強をしたことがある、ボン大学に留学したころだ、となつかしように話されていた。

結婚退職制度に反対して、労働組合を結成する準備をし、成立後も執行委員を引き受けていた私は、団体交渉の相手として東畑先生を意識しすぎ、学問の先達に教を乞う姿勢に欠けていた。女性を同じ人間として対等にあつかえない組織は、固有の歪みをもっている、日本近代の欠陥もその反映ではないか、というような論難ばかりしていたように思う。私の主張に同意されることは、めったになかったが、それでも腹を立てず、「つまらないことに時間をつかわず、勉強しなさい」と言っておられた。

セイロン大学の留学から帰国したあと、私は労働組合の役員選挙で落選していた。先生の方も所長を退任されていたので、前よりは気楽に話ができた。自著の本や論文が刊行されると、先生の部屋に持って行った。「たくさん本をもらって、とても読み切れないが、君のやつは優先的に読むよ」といって下さっていた。私がテーマとしていた農業水利についても関心をおもちだったが、経済学の外側の制度上の問題と解釈されていたようである。

1977年5月の連休明けに、先生の部屋によばれて行くと、40年ぶりにシュムペーターの『経済発展の理論』（岩波文庫）の改訳を終え、仕事にひとくぎりをつけたところだ、というお話であった。「これまで、計画をたてずに仕事をし、しかも記憶力に自信があったのでノートも日記もつけずに生きてきたが、このところ気力も体力もおとろえ、古いことが思い出せなくなってきた。ひとつ君に昔話を聴いておいてもらおうか」。私は東畑先生の学問から遠くはなれたところで勉強し、シュムペーターさえ読んだことがなかったので、少し当惑した。どういう理由で私に声をかけて下さったのかわからなかったが、きちんと聞き、ノートをとれる自信もなかったし、ひと

りで貴重な体験談をうまく引き出せるとも思わなかった。

そこで、当時戦争期の日本と東南アジアに関心をもっていた末廣さんをまきぞえにして、先生とのインタビューをテープに録音することにした。東畑先生は「おれの生きているうちは、人に聴かせるなよ」とおっしゃっていたので、私たちはテープ起こしの作業もしないで保管していた。先生の方から明示的に言われなかったが、第1回のインタビューをはじめてみると、この機会に自伝をまとめ、それを日本経済新聞の「私の履歴書」欄に連載しようとしていたことがわかった。一度に約2時間のお話をうかがい、末廣さんが克明なメモを作って先生にお渡しし、執筆の参考にしていただいた。私もその都度、補足の質問事項を書いて、お送りするようにしていた。

ただ漫然と回想を聴いているだけでは、つまらないので、次のような3点をインタビューの支柱とすることに決めた。

- (1) 伊勢の地主の長男として生まれ育った東畑先生が、農学部に進学しながら、いかにして経済学研究の道へ進まれるに至ったか。
- (2) アメリカとドイツに留学され、欧米の学問の吸収に努められた先生が、アジアへの関心や関係をどのような形で深められたか。
- (3) 急速な工業化のインパクトを受け、変容をせまられた農業に、「農政の神様」としてどのような展望を、持ちつづけてこられたか。

しかし、私たちのインタビューが順調に進んだわけではない。1977年7～10月、大内力氏を団長とする海外学術調査団の一員として私が日本を留守にしたり、先生のご病気や政治家の突然の来訪などがつづいたりして、たびたび中断していた。東畑先生は非常に意欲的に話され、私たちは多くのことを学んだ。先生の執筆のスピードが私たちの「聴き書き」を追い抜き、戦前の話をようやく聴き終えたところで、日本経済新聞の連載（1978年4月30日～5月30日）が始まってしまった（この連載は加筆訂正のうえ、東畑精一著『私の履歴書』として、日本経済新聞社より1979年に刊行された）。

1978年6月19日と7月3日の両日（各2時間）、この連

載記事に対する私たちの感想を述べるとともに、「大東亜戦争」期の回想を聴いた。このあと、私はスリランカと南インドへ、末廣さんはタイへ、長期に赴任することになり、先生の声容に接する機会をなくしてしまった。腰が痛んでどこにも行けないから、この夏はドック入りする、それが終わったらまた思い出話をしよう、といわれたのに、健康の方が思うように回復されず、結局この日（1978年7月3日）が最後となってしまった。この日のヒアリングの後で先生は、「実は『私の履歴書』では書けなかったけど、書こうと思っていた項目があと10くらいあるんだ。それに大学のことはほとんど何も書かなかったけど、大学で何をやったのか、そしてどんないい人間が生まれ育ってきたのか本当は書きたかったんだ」と、残念そうにおっしゃられた。

末練がましいが、アジア経済研究所創立記念式典の日と重なった、この日の別れは、いまだに私たちの胸裡を去らない。

先生の逝去後、辻川幸子、仲山裕子の両氏にテープ起こしを手伝ってもらい、400字詰原稿用紙で200枚くらいの記録を作成した。ここではそれを約半分に短くしたが、先生の言葉づかいは、なるべくそのまま生かすように努めた。人名や年月については、末廣さんが文献資料によって、可能なかぎりの確認を行なった。

最後に、東畑先生の回想をうかがって、私なりに感じた印象を記しておきたい。

今から考えると不思議なくらいであるが、先生の勉強された大正時代には、価格理論を中核とする経済学は、福田徳三や柳田国男などの若干の例外を除いて知られていなかった。先生の生活自体、食糧は郷里から送ってもらい、丸善で洋書を買っても自分で代金を払わず、益暮れに父親にまとめて清算してもらい、その総額さえ知らない、という状態であった。アメリカで暮らしてみても、はじめて先生は価格の有効性を体験的に実感し、ドイツに渡りシュムペーター教授によって、経済学に開眼されるのである（ちなみに東畑先生の卒業論文の題目は、「リカード派土地社会主義」である）。このとき以来、先生の課題は、日本農業を価格理論と企業者の理論で分析することになる。

約40年おくれて生まれてきた私からみると、農業を価格メカニズムで説明しよう、とする研究プログラムそのものに無理がある。何度もそう申し上げたが、方法の問題ではなく能力の問題である、と頑強に否定されるばかりであった。先生は経済学の周辺をうろついている、といいながら経済学の中核たる価格理論の磁場から飛び出すことは、すこしも考えられなかった。土地市場、労働市場および信用市場における価格理論の無力を確認し、むしろ脱商品化過程を研究しようと考えている私には、ちょうど逆の方向を目指しておられたように思われるのである。

純粹理論研究こそ学問だ、と考えられる先生にとって、「小さい頭」で政策を論じたり、農林大臣の顧問になったりするの、は、学者のする仕事ではない。その意味で、政策を排した宇野経済学を非常に高く評価されていた。深い学識に加えて、他人の話を聴く耳とすぐれた判断力をあわせもっておられたので、時の政府が先生を必要とし、各種の審議会の会長にまつりあげていた。しかし、そんなことは先生の誇りでも何でもなかった。自分に対して、他人に対しても正直な方であったから、私たち

に向かって威張ったり、自慢したりされることは、まったくといってよいほどなかったのである。

シュムペーターに学んで以来、純粹理論をめざしてきたものの、学問のための経済学は排し、生きた現実の有効性を発揮できる経済学でなければならない、というのが先生の信念であった。私たちの少し前には、純粹経済学が現実を的確に分析し、明日への展望を切り開くのに有効な手段であると、本心から信じ込める時代があった。そればかりでなく、価格理論以外の視点をもち込むことが、事態を正しく把握するうえでの障害物であったり、混乱の原因であると思いつめる時代でさえあった。長い日本の歴史からみれば、そのような時代は、束の間のことにすぎないかもしれない。しかし、東畑先生はそのような時代精神、すなわち経済理論への期待が風船玉のようにふくらんだ時代の要請を先どりして、片意地はらず、ごく正直に体现してこられた。私たちはひとつの時代精神の体现者にめぐりあい、まさに倒れようとする価格合理主義と対話する幸運にめぐまれたのである。

(中村: 龍谷大学教授)
(末廣: アジア経済研究所調査研究部)